

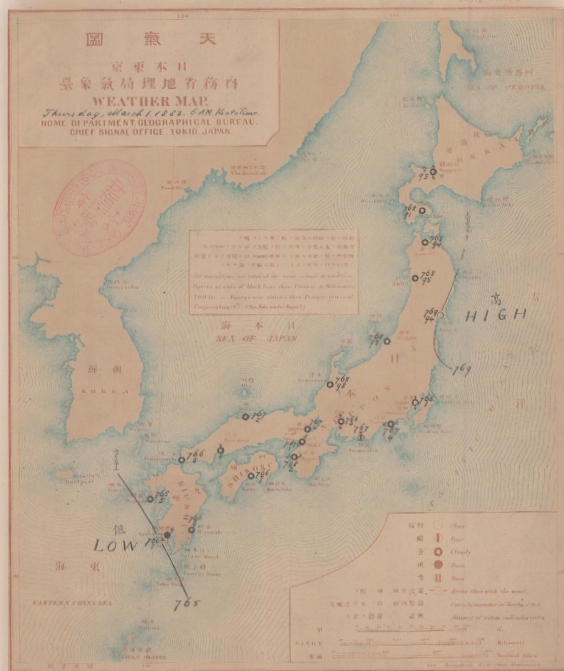
2025.9

秋冬

No.121

思文閣出版

鴨東通信



◇ 日常語のなかの歴史³⁴
おりがみつき【折紙付き】

◇ 川見典久

◇ 知りたいむ

幕府天文方とは何者か

◇ 佐藤賢一 ◇ 梅田千尋 ◇ 平岡隆二

梅雨から「帝国の気象学」を考える

◇ 宮川卓也

哲学者の「不幸な」師弟関係

◇ 杉山卓史

エッセイ

「絵画」と「地図」のあいだ

― 目賀田守蔭の事績から ―

◇ 鶴岡明美

「京都旧記録」類を求めて

◇ 牧知宏

◇ ミレニアル世代の研究レシビ⁸

アレップとライデンのあいだで

― 一七世紀オランダにおけるアルメニア人写字生 ―

◇ 稲垣健太郎

◇ 史料探訪⁸¹

初期伊万里誕生

◇ 藤原友子

佐野みどり・小嶋菜温子・高橋亨編

「幻の源氏物語絵巻」をもとめて

——十七世紀、絵巻の時代と古典復興

7月刊行

A4判横綴じ・函入／五〇四頁／
定価 三八、五〇〇円

「源氏絵」の歴史のなかでも際立つ個性を有している「幻の源氏物語絵巻」。黄金をふんだんに使用した豪華な造りに加え、他の源氏絵のパターンとは一風変わった場面選択が見られる点でも注目される。現在までに存在が確認されているのは20巻弱、完本で揃っていたとすれば、全体で200巻を超えるものであった可能性がある。誰がどのような意図のもとで、このような絵巻を制作しようとしたのか。詞書染筆者の問題も含めて、江戸時代初期の文化史・政治史・経済史的な状況を見渡しての検証が必須となろう。日本文化史のミッシングリンクというべきこの豪華絵巻の謎に、豊富なカラー図版と国文学研究者・日本美術研究者15名の論文でもって迫る。

【目次】 図版編

桐壺 上中下三巻（個人蔵）／帚木 一卷（部分、ニューヨーク・パブリックライブラリー）
スベンサー・コレクシオン蔵／空蟬 残欠巻（石山寺蔵）／夕顔断簡（個人蔵）／末摘花 上巻（石山寺蔵）／末摘花 中・下巻（部分、ニューヨーク・パブリックライブラリー）
スベンサー・コレクシオン蔵／葵 六巻（京都国立博物館蔵）／葵 断簡「葬礼図」（メトロポリタン美術館蔵）／賢木 詞書（部分、個人蔵）／同・絵 断簡（個人蔵、メトロポリタン美術館蔵） ※詳細はお問い合わせください

論文編

「総論」「幻の源氏物語絵巻」と〈ものまざれ〉——「注釈的絵画」にみる再創造と文学／美術史学の可能性
（小嶋菜温子）

第一部 「幻の源氏物語絵巻」の復元にむけて

盛安本源氏物語絵巻（幻の源氏物語絵巻）再考

（佐野みどり）



*

物語絵画としての盛安本源氏物語絵巻——「源氏物語」の年立を通じた一考察（エステル・ボエール）
源氏物語絵巻 桐壺——幻の「源氏物語絵巻」巻頭巻としての意義
（吉川美穂）

京都国立博物館蔵「幻の源氏物語絵巻」葵から——メトロポリタン美術館蔵「葬礼図」の定位とあわせて
（松岡知華）
パーク本「源氏物語絵巻」賢木巻断簡から
（稲本万里子）

「コラム」「幻の源氏物語絵巻」の詞書と絵画化——物語全文を書き写すことの意味
（青木慎一）
スベンサー・コレクシオン蔵「幻の源氏物語絵巻」三巻
（渡辺雅子）

「特別寄稿」石山寺所蔵 空蟬残欠巻 田中水萌

第二部 十七世紀、絵巻の時代と古典復興 九条家の源氏学と絵画

（高橋亨）

*

「幻の源氏物語絵巻」の製作背景追考——九条家・賀茂社家の人々とその環境をめぐって（海野圭介）
鹽神社蔵「絵詞 保元・平治」をひもとく——杉原盛安・杉原本と「保元・平治物語絵巻」（鈴木彰）
「幻の源氏物語絵巻」の「空蟬」——中世・近世の「源氏物語」享受とその展開
（水谷隆之）
室町時代やまと絵と源氏絵の再生——大画面の出現と土佐光信・光茂・光元による新展開（高岸輝）
「コラム」近世絵巻の研究に向けて
（若杉進治）

*

「結び」本書の成果と今後の課題

（高橋亨）

日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

日常語の なかの歴史 34

「あの投手は折紙付きの剛腕だ」

人物や物の実力・価値が確かであることを表す「折紙付き」という言葉がある。ここでいう「折紙」とは、折り鶴などの紙細工のことではない。もとは紙を横半分に折って用いる文書形式を指し、のちに鑑定書を意味するようになった。つまり、「折紙付き」とは正式な鑑定書が添えられた信頼できるものという意味である。

おりがみつき

折紙付き

刀剣の世界において、この「折紙」の発行を認められているのが、本阿弥家である。本阿弥家では毎月、本家と分家が集まり、依頼された刀剣を鑑定し、結果に応じて折紙を発行していた。その内容は、①刀剣の作者名（あるいは異称）、②真作であることを保証する「正真」の文字と刀剣の特徴、③価値を金額で示した「代付」、④日付と署名からなる。このような鑑定書が必要とされた背景には、刀剣が本来の用途である武器としてではなく、贈答品として求められていたという当時の事情がある。

室町時代には、將軍への献上にふさわしい刀工の格付けが形成され、名刀は次第にステータス・シンボルとなっていた。江戸時代に入ると、將軍と大名の間で、家督相続や婚姻・任職・功績に対する恩賞など様々な場面で刀剣が贈答された。贈られる多くは室町時代以前の「古刀」であり、その真贋と価値を保証するため、折紙の存在は欠かせなかった。

しかし、武家故実家として知られる伊勢貞丈が「本阿弥家による刀剣の目利は、鍛冶の正作か否かを目利するなり。この刀は快く骨の切るや否を目利するには非ず」と述べているように、本阿弥家の鑑定はあくまで古刀の作者とその価値を見極めることに主眼が置かれていた。つまり、刀剣本来の性能である「斬れ味」を保証するものではなかったのである。そのため、当時は「試刀」により斬れ味の確認が行われることもあった。

情報が過剰にあふれる現代、たとえ専門家が保証する「折紙付き」のものであっても、それが真の価値や実力まで保証するものとは限らない。盲目的に信じるのではなく、最終的には自らの目で見極める姿勢が求められている。

（川見典久・黒川古文化研究所研究員）

ていーたいむ

幕府天文方とは何者か

佐藤賢一
（電気通信大学教授）

梅田千尋
（京都女子大学教授）

平岡隆二
（京都大学准教授）

近刊の『幕府天文方の研究』は、江戸幕府の天文方の創設前史から、最後の天文方が尋常小学校の事務員として生涯を終えるところまでを扱った、初めての通史的な研究です。彼らはその歴史のなかで多様な役割を担ったために、実はその全体像を把握するのが難しい存在です。そこで、専門の異なる編者のお三方に、本書を編んで得られた知見をお話しいただきます。

■それぞれの天文方とのかかわり方

佐藤…私の専門は江戸時代の数学、いわゆる和算と測量術の歴史です。測量術の方では、伊能忠敬の仕事なども研究対象です。これまで、和算にせよ、測量にせよ、ある人物の業績を追いかけていくと、天文方にたどり着くというケースが多くありました。た

例えば、山路主住という天文方がいるのですが、彼自身は関流の和算家として有名な人物です。また、伊能忠敬が天文方を母体として活動していたというのは、伊能忠敬研究では有名な話です。ですから、自分の研究している人物たちと天文方とはどういう関係になっているのか、常々気になっていました。

梅田…私の専門は日本近世の宗教社会史で、なかでも陰陽道を専門としてきました。私はもともと廃仏毀釈など明治維新で消えてしまった民間宗教者の世界に関心があって研究をしています。そのなかで、陰陽道の土御門家の史料を研究に利用してきました。陰陽道というと呪術的なイメージのある分野ですが、土御門家史料には関係する暦算家や和算家が出てきます。自分自身でそれを科学史的に分析して位置づけるというのは難しかったのですが、陰

陽道と曆算家・和算家との関係については考えてきました。

江戸時代の暦というのは、天文学的な情報だけではなくて、古代の陰陽寮の造暦の伝統をひいた暦注が載り、かつ陰陽師という民間宗教者が携わって世に出たものでした。天文方は、江戸時代には科学の主役で、陰陽師は彼らに負けていくというイメージだったのですが、それだけではなくて、意外と人的にも仕事内容にも接点や共通点が大きいことがわかってきました。

平岡…私の専門は科学史で、特に天文学について調べてきたので、幕府天文方の史料に関しては、研究を始めたときから注目していました。ですがふだんは、中国の漢籍とか西洋の書物、器物が江戸時代の日本に入ってきて、それがどういう風に理解されて利用されたのかという現象全般に興味があつて、異文化交流的な視点で科学史を研究しています。天文方について本格的に扱ったのは幕末の大村藩士で天文方に入門した峰源助のことくらいなのですが、それ以外にも、交流史的な史料とか人物を追っていくと、天文方に出会うということは多くありました。やはり江戸時代の天文学史は、幕府天文方を中心に描かれますので、いつか自分なりに研究を深めたいなと思つてはいました。

■天文方を通史的、横断的につかまえる

佐藤…この企画の発端は戊辰戦争で沈んだ榎本艦隊の開陽丸の引き揚げ資料のなかに、天文方に関する古文書があることに私が気付いたことでした。たまたま訪れた江差町の開陽丸記念館でそれを目にして驚きました。そこで、梅田さん、平岡さんのお二人にこ

れを研究しよう、そしてやるなら幕末のことだけでなく、天文方の始まりからやろう、とお誘いしたのが始まりです。本書の編者を三人体制にしたのは、天文方をどう扱うかという切り口を考えた時に、先行研究ではだいたい天文学史か幕末の蘭学史・洋学史が多かったのですよね。そこで、平岡さんには、蘭学・洋学というバックグラウンドがある。でも、それだけにとどまらない、文化史・宗教史の方面もと考えたときに、梅田さんをお願いしようと思いました。そして、宗教史、科学史、蘭学・洋学、さらにはもう少し広げて、いろいろな地域の視点を入れたいと思いました。つまり天文方というのは、江戸だけをみていてもわからないということです。そう考えて、協力していただきたい方に執筆の声を掛けしたという流れでした。

平岡…これまで天文方に関わつては、天文学史では渡邊敏夫さんが多くの業績を残しておられますが、他分野の方と一緒に論文集を作るとか、共同研究をやるということは、なかったですね。

梅田…渡邊さんの時代には、陰陽道史研究が室町時代以前で止まっています。江戸時代以降の陰陽道は形式的、形骸化していると評価をされていたと思います。それはたぶん、応答できる歴史学の研究者がいなかったからだと思います。

佐藤…編集しながら、こんなことを考えていました。天文方の歴史をトンネルの入口から出口までの道筋で例えるとすると、入口からは衣冠束帯を纏って占いをやっている人たちが入っていく。そしてトンネルの出口からは洋服を着込んだ近代人が出てくる。天文方にはそういうイメージがあつて、このトンネルの真んなかで



佐藤氏

起きていたことを明らかにしたいなと。これまでの通史では、江戸時代の四回の改暦を順番に語ることがあったくらいではないでしょうか。

梅田…途切れ途切れで、まとまった史料がないということが大きいのではないかな。

天文方の渋川景佑が『明時館叢書』という史料集を作って渋川春海の時代から天保までをつなげようとしたが、それだと部分的にしかわかりません。

佐藤…そもそも渋川家以外のことはわからないですね。

梅田…今回、新しい史料がちょっとずつ出てきていて、それが各章で紹介されていますよね。

平岡…これまでの歴史の見方はこれほど穴だらけだったのか、と気付かされました。それを埋めていく作業がまだまだ必要であるということ、強く感じます。

佐藤…一方、「分野横断的」という話になると、例えば私が関わっている和算史の方では、「この人が天文方とつながっていたのか」とか、「この和算の集団が実は天文方に人材を供給していたのか」とか、結構発見がありました。天文学史は一本の柱として重要なのですが、ほかの分野との共同は、ますます必要だと思います。

■意外と地味な天文方の日常

平岡…たまたま今回おもしろい史料があつて、天文方がふだん何をしていたのか、ということ論じました。案外よくわかっていなかったのですよね。すでに知られてはいた史料ですが、その内容を見てみると、天文方は時代によって、あるいは家によってかなり違う仕事をやっていたかもしれないことが見えてきました。彼らが暦を作る背景について、結構新しいことが見えてきたと思いますね。

梅田…暦を作つて配ると言うのが簡単なようですが、かなり地味な事務作業が多いのですよね。江戸と京都・三島・奈良の間で膨大な数の手紙をやり取りしている組織だということがあらためてわかりました。奈良で暦を配っていた吉川家文書（国立歴史民俗博物館蔵）を見ても、奈良で一年に何千部かの暦を刷つて、占いと一緒に配っている家に、天文方が、「今年あなたが作つた暦はこの字が間違っています」という書状をわざわざ届けています。その勤勉な様子が印象的です。

佐藤…下役、出役の人たちがいないとやっていけないですよ。

平岡…計算ばかりしているのかと思つていたら、この人たちはずっと書状を書いていたのかと思うくらい、研究よりも運営にまつわる史料が多くて、仕事をしていた環境がよくわかりました。

梅田…今年重要文化財指定を受けた渋川景佑の天文観測日誌『靈憲候簿』のような天文学的な内容の史料から受けるイメージとは違う、もっと地味な仕事が多かつたのでしょうかね。

佐藤…『靈憲候簿』は幕末の一六年間の記録しか残っていないので

すよね。日誌の類いは家ごとに付けていたはずなのですが。

梅田…東北大学の林文庫にも日誌的な史料はあるのですが、天保年間以降のものです。

平岡…林文庫の史料には、観測だけでなく誰とどんなやり取りをしたかまで書かれています。そういった記録が天文方側に残っているのは今のところそれだけです。それに対して、陰陽道の土御門家文書などには、かなり多くの史料が残っている。両方を丁寧に見ることで、天文方の実態も見えてくるだろうし、そこには科学的に分析すべきこともあるはずですよ。

■江戸だけを見てもわからない

——時代が降ると職務内容が多様になる点も特徴ですね

佐藤…寛政の改暦以降、業務が激増したのでしょね。海外とのやりとりを担わされてからは、天文方が、満洲語、ロシア語、ア



梅田氏

イヌ語をやれと言われて、いったい彼らの本職はなんなの、という状況になります。本書の松本英治さんの章で論じられていますが、天文学を専門としていたはずなのに、突然外国事情が入ってくるわけです。天文方の歴史をこのように捉えることは、分野横断でもあ

るし、一方で、北方に視点を向けた地域的な見方ともいえます。最近、北海道・蝦夷地の歴史が新たに多方面から評価の対象になっていますけれども、幕府天文方にアイヌ語の専門家がいたというのは、そういった関心からも興味深いと言えるのではないのでしょうか。

冒頭で地域の視点を入れたかったと申しましたが、それはたとえば、梅田さんが扱われた暦師こよみしのことも念頭に置いています。天文方が扱った暦の取引相手が全国にいたということです。

梅田…暦は日本中に流布していくのですが、その担い手は地域ごとにバラバラでした。

佐藤…暦の流通の背景には地域的な実情があるはずで、中央の天文方だけではなくて、それを捉えなければならぬとぼんやり思っていたところに、梅田さんが明確に暦師の話題を書いてくださいました。それから、オランダ通詞との関係で長崎、伊能忠敬前後の時期には間重富はなぢりふや麻田剛立あさだこうたてのグループがいる大坂、もちろん朝幕関係で京都、少なくともこれらの地に拠点を持った人たちの関係を視野に入れないと、幕府天文方の歴史は書けないだろうと思っていたのです。論文執筆に向けた調査のなかで、蘭学の関係では越中から史料が出てきましたし、対ロシア問題では仙台藩の関わりがありました。原稿を総覧して、各地に天文方につながる地域の歴史があるのではないか、という感想すら持ちました。

平岡…伊能忠敬が全国を測量したことで、天文方の測量技術が各地に伝わったことはよく知られています。それから、天文計算をする時には、経度差が重要になるので、彼らは江戸で観測をします



平岡氏

が、大坂の間が観測した情報、あるいは九州で弟子が観測した情報を集めることによって、自分たちの観測精度を高めていました。ですから、彼らの仕事はもともと地域との関係性を持っていたということもできると思います。

大島明秀さんが、長崎通

詞が天文方にヘッドハントされて、天文方のラランデ暦書の翻訳に関わっていくということを、蘭書と付き合わせて、どのように翻訳していたのかということまで追求してくれています。天文方が、仕事を遂行するために幕府のネットワークを通じて必要な人材を集めていたということが、史料に即して論じられています。

佐藤…多様な登用ルートがあるのも天文方の特徴ですよね。伊能忠敬は佐原の御隠居さんですし、間はもともと大坂の質屋ですが天文方並の扱いで出入りしています。人事に関してはかなり融通無碍といえます。

梅田…他の例ですと歌学方とか医学館とか、いろいろな登用ルートがありますね。

佐藤…ただ御家人たちの人事とは全然違いますよね。

梅田…天文方は位置づけも微妙で、ぎりぎりお目見えというところですよ。

佐藤…「御鉄砲御筆筒奉行格」でしたか。マージナルな存在だったからこそ自由がきいたのでしょうか。

■なぜ多様な役割を担う存在になったのか？

梅田…幕府でも朝廷でも人材を育てる学問機関を持てなかったというのがそもその問題でしょうか。

佐藤…人材養成機関を内在していなかったから、いろいろなところから人を集めざるを得なかった。すると、各地からさまざまな人がやってきて、あれもできる、これもできるということになって、多様な仕事を押し付けられるようになったのかな、と思ってしまう。天文方の当初、渋川が任命された時は、「改暦ご苦労様」という意味の名誉職みたいな扱いなのです。もともと明確なプランやビジョンがあつてできた役職ではないのでしょうか。

梅田…年暦の作成と解説をする程度の組織として続けるつもりだったのではないのでしょうか。

佐藤…実務は朝廷に任せても良いと思っていたかもしれませんが。

梅田…幕府が責任を持って暦を作り続けるぞ、という意気込みは感じませんね。暦法を作ったその後のことは、徳川吉宗まで誰も考えなかったというのが実際ではないでしょうか。

佐藤…そんな調子なので、享保六年に暦を作れなくなるという危機に陥ってしまう、なんてことも起きるのですよね。

平岡…最初は属人的で、幕府の目的に適う人物が役について、それが組織として成熟していく過程で、雪だるま式に仕事が増えていったわけですから、やっている方は大変だったでしょうね。

嘉数次人さんの章で面白いなと思ったのは、西洋化・近代化が進む一方かと思いきや、幕末の渋川景佑は日本的な要素を暦の中に採り入れようとした点です。

佐藤…神武紀元とか不定時法を採り入れようとしていますね。

平岡…近代化と逆行しているような動きもあるので、幕府の意図とか、土御門家との関係とかをつぶさにみていかないと、単純には理解できないですね。

佐藤…そういった複雑さを出せたのも本論集の成果ですね。

梅田…明治以来の単線的な「開化史」を今さら引き継がないですからね。

■まだまだやるべきことがある

佐藤…朝幕関係とか幕府内の組織としての位置づけとか、各章のなかで重要な問題提起をしていただと思います。あとは、東アジアのなかで天文方をどう評価できるかというのは、今後考えてみたいことです。

平岡…これまで天文方は海外の影響を受けていたとされてきたけれども、東アジアの暦学全体のなかでどう評価できるのかは、検討されてきませんでした。書物がどういう風に流通していたのかに関しては、今回とりあげた事例に加えて、これから厚みを増やしていくことで、比較ができると思います。彼らは、江戸で閉じて仕事をしていたわけではなくて、広い意味で西洋、中国、日本を含めた知識の循環、ネットワークのなかにいたということが、臆げながら見えてきました。

梅田…史料がちよつとずつ見つかってきていますが、まだまとまっているとはいえません。だから、天文方の史料一覧みたいなものがあつたらいいと思います。今回はあまり触れられなかったのですけれど、藩に天文方がいたところもありますよね。

平岡…地方の藩には数理科学に関わることをやっている人たちがいますね。薩摩藩、大村藩にもいました。岡山、加賀、弘前にも

佐藤…仙台には算術と一緒に天文学を教える人たちがいました。

梅田…あと会津。そういう地域の史料も含めて、目録があると、いろいろな人が天文方研究に参入できるようになりますよね。

平岡…それから、今回佐藤さんが、高橋家の史料が、いまだいけ残っているということを示されたのは、高橋という名前ではなくても、その弟子筋など関係のあつたところに史料が残っているという、おもしろい事例だと思います。

佐藤…そういった方面にも探索の手を広めるとまだ新発見の可能性がありますね。今後の研究展望も含めて、かなりインパクトのある論集にできたのではないかと思います。

(二〇二五年八月五日・於思文閣)

佐藤賢一・梅田千尋・平岡隆一編

幕府天文方の研究

A5判上製・約五〇〇頁／予価八、八〇〇円

▼詳細26頁

梅雨から「帝国の気象学」を考える

みやがわたくや
宮川卓也

二〇二五年もまた「異常気象」となっている。こうも毎年続く、もはや「異常」が「正常」あるいは「平常」と言ってさしたる支障もなさそうだ。気象庁の速報値によれば、西日本で平年より梅雨明けが「かなり早い」ものとなり、六月下旬までに明けたという。東日本は七月中旬から下旬で、関東甲信以外は平年より早かった。降水量も少なく、本稿執筆時点（七月中旬）でははっきりと言えないが、稲をはじめ各種農作物の生育に少なからず影響を及ぼすとみられている。

気象学の歴史を研究してきた筆者は、しばしば明日の天気や台風動向、はたまた「異常気象」の原因について質問されることがある。いつもの答えは「わからない」である。筆者は気象予報士ではない。歴史学者である。筆者の先輩に地震学の歴史を研究している方がいるが、彼も「今回の地震の要因は？」「次に大地震が来るのはいつ？」と聞かれるという。やはり「知らない」と答えられている（地震予知はそもそも不可能）。「科学史家あるある」かもしれない。

ところでこの「梅雨明けが平年より早い」という表現には、科

学史的にみれば、歴史的検証が求められる要素がいくつか含まれている。たとえば、そもそも「梅雨（入り・明け）」とは何を指すのか。その理解はいつごろ形成されたのか。過去三〇年の平均を基準とする「平年」は何をもって「科学的に妥当」とされたのか。気象庁はなぜ、どのような経緯で梅雨入り・明けを発表しているのか、などを問うことができる。

紙幅の限られた本稿ですべてに答える余裕はないが、「梅雨」に入った／明けたかどうかは、「梅雨の季節が過ぎてから、春から夏にかけての実際の天候経過に基づいて梅雨入りと梅雨明けの時期を総合的に検討し確定」している（気象庁HP）。確定前の段階では、先に引用したように速報値が出され、主に梅雨前線と太平洋高気圧の位置関係などから判断され、「梅雨入り・明けしたとみられる」のような表現が用いられる。気象学は常に未来予測を求められる科学でありながら、実際に発生した自然現象の後追いの科学であるから、こうした表現にならざるをえない。

ここで問題としたいのは「梅雨」の定義が検討された歴史的経緯である。この天気現象そのものは古来より知られており、地域

によって時期に幅があるものの、春と夏の間、現行の暦で五月下旬から七月中旬ごろがその時期にあたる。中国で梅の実が熟す頃であるから梅の字が用いられているとする説が有力らしい。一般的感覚では、春が終わって蒸し暑さが感じられるころ、晴れより曇り・雨が多くなってきたら梅雨入りかなと捉える人が多いと思う（近年の「異常気象」はその感覚も崩しつつあるが）。

前置きがずいぶん長くなってしまった。拙著『帝国の気象学——近代日本の気象事業と「日本気象学」の構想』（近刊）は、梅雨や台風など東アジア特有の気象現象のメカニズムが解明されていく過程が、まさに日本の帝国主義国家としての歩みと軌を一にしていた点を論じている。われわれ日本人のよく知る梅雨とは何か、どのようにして発生するのか。明治から大正、昭和前期にかけて、気象学者たちは論争や検証を重ねてその機構の解明に取り組み、その結果、梅雨は東アジア全域を見渡してはじめて理解できる現象であると認識するに至った。

台風についても同様で、こんにちではきわめて精確な予報および精密な分析が可能となったが、発生から移動経路、台風のエネルギー、内部構造など、基礎となる理解は、東アジア・北西太平洋の広域にわたる観測網が土台となった。そしてその土台は、帝国主義の時代に周辺国・地域の植民地化と同時に築かれた帝国気象観測網であった。そうした背景のもと進められた梅雨や台風、それらを含めた日本の気候についての科学を、拙著は「帝国の気象学」と呼んでいる。

そもそも気象学とは、広範囲に張り巡らされた観測の網目から、

同じ観測機器と単位を用い、同じ時刻にとられたデータがなければ成り立たない科学である。それを成り立たせるには、帝国・植民地という国家システムはきわめて効果的であった。気象学研究はインフラに依存する科学だからだ。気象学と帝国・植民地は親和的なのである。そして「広範囲で」という特質に限ってみれば、現代の「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」にも受け継がれている。全地球規模のデータを解析するIPCCは、旧帝国の築いた観測網、それを引き継いだ旧植民地の観測網から、「国際協力」の名の下にデータを収集している。さらにいえば、IPCCの構成員に発展途上国出身者が少ない、つまり旧帝国出身者が多数を占める点に鑑みると、いまま「帝国の気象学」は継続中と見てよいのかもしれない。

日常的に経験するさまざまな気象現象を前に、あるいは多様な媒体で入手できる天気予報から、その歴史的背景に考えをめぐらせる人もそうはいないだろう。しかしそうした歴史の上に現代のわれわれが享受する気象知識や関連サービスはある。

さて、ことしの梅雨は雨が少ないために各所で水不足の懸念が出ているが、かといって多すぎても困るのもまた事実である。筆者が住む広島は二〇一四年と一八年に豪雨災害を経験した。暑さも雨も適度であってほしいと多くの人が願うところだろう。ことは水害や台風、猛暑がどうなるのか。筆者に聞かれても「わからない」と答える他ないが、被害の出ない程度に雨は降ってほしいし、「平年並み」の暑さであってほしい。

哲学者の「不幸な」師弟関係

すぎ ちや たくし
杉山卓史

「知」や「技」の継承は、どの分野でも重要な問題である。芸術の領域ではあまり見ない（聞かない）のだが、哲学史を勉強していると、しばしば（よく言えば）ドラマチックな、（悪く言えば）不幸な師弟関係にしばしば出くわす。

比較的新しいところで有名なのは、二〇世紀初頭のフッサールとハイデッガーとの関係であろう。現象学という哲学運動を創始したフッサールが、その後継者として最も期待したのがハイデッガーであり、ハイデッガーも当初は助手としてその期待によく応えた。主著『存在と時間』（一九二七年）も、フッサールへの献辞から始められている。しかし、同書はフッサールの現象学から逸脱する「哲学的解釈学」を萌していた。それを敏感に感じ取ったフッサールは、『ブリタニカ百科事典』の新項目「現象学」の共同執筆へとハイデッガーを誘い、彼を再び自陣営に引き戻そうとした。しかし、結果は逆に両者の見解の相違が浮き彫りになるばかりであり、結局フッサールの単独執筆となった。以後、両者が再び理解し合うことはなかった。

さらに、ここに当時の情勢が暗い影を落とす。ユダヤ人フッサ

ールは、一九三三年のナチス政権樹立後、大学入構禁止・著作発禁等、その公的學術活動のすべてを禁じられた。それに対してハイデッガーは、フッサールの後継として教授を務めていたフライブルク大学で総長に選出され、ナチスにも入党している（もちろん、このことは戦後大問題視され、今ではドイツの大学哲学科では「ハイデッガーなど読むな」とさえ言われているという）。

この約一世紀半前にも、一見不幸に見える師弟関係があつた。カントとヘルダーである。

カントはケーニヒスベルク（現・ロシア領カリニングラード）大学で一七五五年から九六年まで教壇に立つた（最初は私講師として、七〇年から正教授として）。ヘルダーはその最初期、六二年から六四年までその講義を聴講し、大きな影響を受けた（その際のノートが残っており、これはカント研究にとってもヘルダー研究にとっても貴重な資料である）。カントがヘルダーにいかに関心をかけていたかは、この苦学生に自らの講義を無料で聴講する許可を与えたことから窺える（正教授は受講者の数にかかわらず国から俸給を保証されるが、私講師は受講者から徴収する聴講料で生計を立てなければならなかった）。ヘルダーの最初期の論考「存

在試論」は、今でいう「期末レポート」のようなものであり、やはりカントへの献辞から始められている。ほどなくヘルダーはケーニヒスベルクを離れるが、書簡を通じた両者の親交は続き、やがてカントは『純粹理性批判』（八一一年）、ヘルダーは『人類歴史哲学考』（八四〇九二年）という、それぞれの名著を公刊する。しかし、後者に対してカントは手厳しい論評を下した。ヘルダーの歴史哲学は「詩的類推」であって「論証」ではない、というのである。これにヘルダーはショックを受け、以後、意趣返しとばかりに激烈な旧師批判を繰り返す。しかし、ヨーロッパ哲学界の頂点に君臨しつつあったカントに対するそのような批判は、逆にヘルダーの立場を悪くするばかりであり、ヘルダーは孤立無援のうちに晩年を過ごさざるをえなかった――。

これが、一般的に理解されているカント―ヘルダー関係であろうが、それはかなり一面的なものではないか。カントから哲学・美学の勉強を始め、徐々にヘルダーに軸足を移していった私は、今そう考えている。

たとえば、ヘルダーの次のような述懐に耳を傾けてみよう。「私は、私の師でもある一人の哲学者を識るという幸運に恵まれました。彼は生涯の最も輝かしい時代において、若々しく、はつらつとした生気に満ちていましたが、それは、私のみるころでは、老年になるまで衰えることがありませんでした。彼の広く考え深げな額は、尽きることもない快活さと歓びをたたえており、口からは、含蓄に富んだ言葉があふれ出し、諧謔や機知やユーモアはたちどころに口をついてきました。彼の講義は、最も楽しい談話の

時でもあったのです」。カント―ヘルダー関係を語る際にしばしば引き合いに出される一節だが（たとえば、坂部恵『カント』講談社、二〇〇一年、一二五頁）、これが書かれたのは、ヘルダーが満腔の感謝をもってカントの許を離れた直後ではなく、まさに「泥仕合」を繰り広げている最中の一七九五年（『フマニテート促進のための書簡集』）なのである。ヘルダーは、カントその人に対する感謝や尊敬の念をもち続けつつ、その学説に対して真剣勝負を挑んでおり、むしろ学説批判の模範とさえ評することができる。カントもカントで、ヘルダーの批判を重要なものと考えており、再批判を用意していた（が、老衰がその実現を許さず、弟子に委ねた）。そして、肝心の論争主題も、人類の歴史は普遍的な一点を目指して進行するものなのか各時代・各民族にそれぞれの目標があるのか、哲学的思考は厳密な論理によってのみなされるべきか詩的類推も許されるか、人間の理性の限界を見きわめるのに「言語」という契機をどれくらい考慮すべきか等、今日の目から見ても哲学的に重要な諸点を含んでいる。「カントとは別の仕方で」思考を紡いでいったヘルダーは、「田舎のおじさんがわめき散らしているよう」（加藤尚武『かたち』の『哲学』岩波現代文庫、二〇〇八年、一八七頁）と評されるほど口は悪かったかもしれないが、「正しい学恩の返し方」をしたのではないだろうか。

こんなことを考えるようになったのは、私自身が「弟子」の気持ちも「師匠」の気持ちも分かる年齢・立場になったからなのかかもしれない。

「絵画」と「地図」のあいだ

目賀田守蔭の事績から

つる おか あけ み
鶴岡明美

現在、出版準備中の拙著『江戸の実景を記録する』は、江戸後期に現実の風景をリアルに絵に写し取ろうとした作品群（以下、「実景図」と称す）の制作背景を探るものである。画家が絵筆を取って描き出す実景は、写真も動画もなかった時代、地理情報を記録する貴重な資料となり、測量の成果とリンクするものもあった。また、実景図は同時期に盛んに編纂された地誌の挿絵にも影響を与えた。現在「美術作品」として伝わる実景図と、地誌や絵地図製作といった知の営みが交錯する地点を探れないかというのが、拙著の試みである。ここでは、拙著で取り上げる画家の一人、目賀田守蔭（文信、一八〇七―一八八二）の事績を辿りながら、実景図（絵画作品）と地図の境界について見て行きたい。

清水家の家臣の家に生まれた守蔭は、谷文晁の門人となり、下谷山下十軒町に住み、文晁の娘・於徳を娶った。国学者・前田夏蔭の門人でもあった守蔭は、幕末に蝦夷地探検に赴き、数種の実景図を制作した。元治元年（一八六四）には幕府の開成所頭取となり、明治維新後は開拓使御用掛を皮切りに新政府に仕え、正院地誌課勤務に至った。いわば幕府の知的遺産を新政府に橋渡しする

役割を果たしたことも注目される。

画家としての知名度は、同じく文晁に学んだ弟の介庵に劣るものの、画人と絵地図製作者、幕臣と新政府の役人という二つの世界を行き来した彼の足跡は、幕末から明治を生きた文晁門人の有様の一例を示すものとして興味を引く。以下、三つの例を挙げて、架橋者としての守蔭の功績を確認したい。

①「明治改正 大日本輿地全図」（所蔵先：東京国立博物館、北海道大学附

属図書館ほか）の原図提供

銅板の日本全図で、「東京 慶岸堂主人校図／門人 一保斎和雪 銅鑄」の表記があることから、守蔭が原図を提供し、銅版・石版画家であった梅村翠山（一八三九―一九〇六）の工房（慶岸堂）で翠山の門人が銅版を制作したものに分かる。

画面中央は、細かな地名が記された日本全図が占めるが、ここで興味を引くのは、地図の下の方に小さく枠取りして描かれた、長崎、兵庫神戸、箱館、新潟、横浜の五つの港の図である。これらは言うまでもなく「安政の五箇国条約」により開かれた港であるが、海側からやや俯瞰視で港の全景を描く描写は、守蔭が蝦夷地を描

く図のうち「延叙歴検図」(東京大学附属図書館蔵)のように、「实景图」と「絵地図」の中間に位置する作例に近いものを感じる。注目すべきは、これらの図にはそれぞれ「文信」と記した瓢印が刻まれていることである。つまり、凡例には「守蔭」の名を記す一方で、港の図には文晁の弟子であることを示す「文信」の号を用いているのである。地図製作者としての顔と、文晁門下に連なる画家としての顔を使い分けるかのような措置に、二つの領域にまたがる彼の活動ぶりを窺うことができる。

②火山温泉之図(所蔵先…国立国会図書館)の制作

日本全国にある火山と温泉を描く図集である。成立時期は不明だが、各地の温泉についての記述中に「東京」の語を用いることから、明治元年(一八六七)の東京から江戸への改称以降に成立したことが分かる。先述したように、守蔭は正院地誌課勤務であったことから、この課の編纂物である『日本地誌提要』や未完に終わった『皇国地誌』と何らかの関わりを持つ可能性も否定できない。火山と温泉の図を同一の書にまとめていることから、火山の活動と温泉を結び付けて考えていた点に新しさが感じられる。

本書に描かれた二十に及ぶ温泉図は、文晁の高弟・喜多武清の「豆州熱海温泉湧出之図」をもとに描かれた「熱海温泉図」のように江戸期の絵地図等の情報に基づくものと、「雷電山温泉図」のように自身の蝦夷地探検時の図の両方から成る。注目すべきは火山図で、全十一ヶ所のうち九図が谷文晁『名山図譜』所収図を写している。明治に入ってから守蔭の地誌研究が、引き続き師である文晁の著作をバックボーンとしていたことが見て取れる。

③蔵書『田園類説』(谷本教編)の献納

『太政類典・外編』明治四年(明治七年・官規二・賞典恩典一)(国立公文書館蔵)には、明治六年(一八七三)、当時地誌課の御用掛を務めていた守蔭が幕末の蝦夷地探検に関連する図書を九部献上したことについての記事が図書目録とともにあげられる。目録には「今井八九郎測量蝦夷地図 一通」「前田夏蔭蝦夷東西攷證 一冊」などと並んで、「北海道歴検図 六冊」とあるが、国立公文書館には守蔭自筆による同一タイトルの蝦夷地を描く实景图集(全六冊)が所蔵されており、この資料が同館の所蔵に至る経緯を示す情報として重要である。

目録中の書名に『田園類説』とあることに注目したい。本書は小宮山昌世著、谷文晁の祖父である本教(一六八九―一七五二)の増補にかかるものである。本教は美濃、出羽、近江などで郡代・代官所の下役として民政に携わった人物で、後にその能力を買われて田安家に仕えた。農政・民政の手引書である本書が守蔭に伝わった事情は不明であるが、谷家の娘婿という立場で本教の業績を継承する意識があったことの表れと見ることであれば、守蔭の谷家における位置づけについても新たな見方が可能になる。

以上、地誌編纂に関わる一員としての側面を示しながらも、文晁門下の絵師としての意識も強く窺える守蔭の業績の一端を紹介した。美術と学問の区別が現代と異なっていた近世において、風景という情報は、制作者側の意識と目的次第で、異なった形で紙の上に表された。文晁派と地図製作、地誌との関連は今後も注目していきたい。

(昭和女子大学教授)

「京都旧記録」類を求めて

牧^{まき}知宏^{ともひろ}

本年二月に上梓した拙著『近世京都における都市秩序の系譜』の中で使用した史料に「京都旧記録」類がある。近世京都に関わる歴史、特に「下京古町与申候者……」などの文言で始まる京都古町の由緒などが共通して記された史料群で、近世において作成された同種の「旧記」を、筆者は「京都旧記録」類と総称している。以下、些末な一例ではあるが、筆者が院生時代から続けてきた近世京都に関する情報収集の体験を、関係する所蔵機関や史料への御礼も込めて振り返らせていただきたい。

大学院生当時、通っていた京都大学の図書館の書庫で、史料中に記される項目の構成や書き出しの文章がほぼ同じものがいくつも存在することに気がついた。生来、細かいことを気にしてしまう性分で、それぞれの史料の間の異同等が気になってくる。研究を志す者としても、中に記されている情報が同じだからといって、どれか一点だけを見れば良いということにはならなかった。

表紙に記されたタイトルは、「京都旧記録」「下京古町之記」「京町人永昌録」「平安古今由緒集」など、あまり共通性はないが、中に記される情報は、近世初期から中期にかけての京都、特に住民組

織の動向や住民支配に関わる内容で構成されている点は共通しており、研究史においても戦前より史料として使用されてきた。しかし、これら類本の源流に位置する原史料の確認や写本の作成事情については当時まだ研究されていなかった。「できるだけ多くの類本を集めよう」という決意をし、先の見えない研究の一步を踏み出したのは、図書館の薄暗い書庫であった。

「京都旧記録」類の淵源と推定される史料や写本の作成事情については、調査を始めて比較的早い段階で、ある程度目処が付いたが、同種の「京都旧記録」類の類本は予想外に数多く残されていることがわかり、「京都旧記録」類の類本の探索はその後も続けることにした。

類本の調査については、手始めとして、近世京都に関する史料を多く保管する京都市歴史資料館と、京都府立総合資料館（現、京都府立京都学・歴史館）や京都大学の図書館を中心に行った。筆者がこの調査を開始した時期は、いろいろな面で社会がアナログからデジタルへと転換する渦中にあつたが、史料の検索も最初の内はカード目録を一枚一枚めくらなければならなかった。さらに調査

範囲を広げるために、冊子体の『国書総目録』も大変役に立った。これを手がかりに、各機関の蔵書目録などをめくって所蔵を確認していった。

調査をする中では、史料館や博物館のみならず、大学図書館にもお世話になった。閲覧には大学図書館の相互利用制度を利用することで調査が捗った。「京都旧記録」類は作成された京都以外、たとえば大阪や東京にも多くの類本が所蔵されていたため、情報入手するたびに各館へ出かけていって閲覧した。東京へ夜行バスで行って、各館をはしごしたのも懐かしい思い出である。

さらに、デジタル化が進む中で、各館のデータベースで検索してヒットした類本を閲覧したこともある。最近では、史料画像を公開している館もあり、「京都旧記録」類の類本の情報はほとんど追加されていた。加えて、古書店やネットオークションを紹介して流通している類本を発見することがあり、いくつかについては筆者が購入することができた。現在では一〇〇点以上の類本を確認している（詳細は拙著の第四章末の表に一欄している）。

近世中期から後期にかけて、これらの類本が書写を通じて流布していったことは拙著でも分析しているが、類本が作成されたその当時に読まれた現場からは切り離された形で、後世に残されることになったものが存在することにも気づかされた。たとえば一橋大学の幸田文庫の類本など、大学教員の研究・教育目的で大学図書館に所蔵されることになったものもある。史料が作成された時点で本来持っていた機能を理解した上で研究する必要があることは当然であるが、それぞれの史料が現在まで伝来する過程で、ど

のような役割を持たされることになったのかについても目を向けるべきなのだろう。

「京都旧記録」類の類本の中にも、作成された現場から離れ、さらに近代以降の歴史を負わされたものが存在する。たとえば、『国書総目録』をもとに広島大学図書館に問い合わせたところ、戦災（原子爆弾による被災）により失われたとのことで、幻の類本となってしまうものもその一つである。

また、海を超えて国外にわたった史料もある。韓国国立中央図書館のウェブサイトで「京都古町覚書」という類本がヒットするさらに、「京都古町覚書」について日本の国立国会図書館のデジタルコレクションで調べると、朝鮮総督府図書館の機関誌『文献報国』第六三号（昭和十六年九月）に掲載されている「新着図書分類目録」（七月中）に「京都古町覚書」が掲載されていることを発見した。つまり、昭和十六年に朝鮮総督府図書館の蔵書となったものが、韓国国立中央図書館に引き継がれた訳である。「文献報国」の名のもとに海を渡った「京都旧記録」類の類本が背負わされた歴史からも目を逸らすことはできない。

このように「京都旧記録」類を集める旅をする中で、史料自身が作成される際に持っていた意味以上に、様々な歴史を持つて現在に伝来することを肌で感じてきた。生成A I の出現等により今は後は情報の集め方も変わって行くと思われるが、多くの人々の手によって史料が保管され、情報が提供されてきたことは、史料保存の世界の末席に身を置く者として常に心に留めながら、今後の旅を続けていきたいと思う。

（住友史料館主席研究員）

アレツポとライデンのあいだで

——七世紀オランダにおけるアルメニア人写字生

稲垣健太郎
いな ぎ けん た ろう

二〇二三年三月、私はスイス北西部、フランスとドイツとの国境付近に位置するバーゼルを訪れた。旅の目的は博士論文に関連する、とある史料の調査であった。私の博士論文は、ドイツ出身

の東洋学者・外交官レヴィヌス・ヴァルナー（二六六五年没）の生涯と学者としての仕事を論じたものである。二〇年にわたるオスマン帝国での滞在を通じて、ヴァルナーは一〇〇〇点近くの東洋語写本を獲得したことで知られている。ヴァルナーの没後、これらの写本は彼の母校であるライデン大学へと遺贈された。その学術的価値を認識したライデン大学の運営陣は、一六六八年一月、デンマーク出身の東洋学者ペトラエウスと「アラブ人カンディー（Arabier Candy）」なる人物に写本目録の作成を委託した。

これまでの研究では、彼らが作成した草稿は失われたと考えられてきた。しかしヨーロッパ各地の図書館の蔵書目録を調査するなか、私は偶然にも、バーゼル大学図書館が「ガラタ（ヨーロッパの商人や外交官が滞在したイスタンブールの地区）で亡くなったドイツ人外交官レヴィヌス・ヴァルナーがオランダのライデン大学に遺贈したアラビア語、ペルシア語、トルコ語の著作のアラビア語による

目録」を所蔵していることを突き止めた。散逸したと考えられてきた草稿が現存しているかもしれない。そんな期待を胸に私はバーゼルに向かった。

実のところ、バーゼル大学図書館に所蔵されている草稿は、ヴァルナーが所有した写本のうち三〇点のみを簡潔に列挙したものに過ぎず、期待した以上の発見ではなかった。しかしこの発見は、目下私を取り組んでいる研究につながる様々な疑問を呼び起こした。このアラビア語の草稿を作成したと考えられる「アラブ人カンディー」とは何者なのか。ヴァルナーの写本コレクションの目録、それも一七世紀に作成された草稿がなぜバーゼルに存在するのか。

前者の問いについては、同時代の史料から「アラブ人カンディー」の正体を特定することができる。一六五七年八月八日、ライデン大学では「シャーヒーン・カンディー」という名のアレツポ出身のとあるアルメニア人キリスト教徒（Geeker Armenich Christen van Aleppo, genaemt Stahijn, Kandi）を写字生として雇う決議がなされた。このシャーヒーンこそ、のちにライデン大学図書館の東洋語写本

の目録を作成することになる人物なのである。

後者の問いに答えるためには、この草稿の由来を考慮する必要がある。この目録は、スイス出身の東洋学者ヒエロニムス・ハーダー（一六四八―一六七四）の遺稿の一部として、バーゼル大学図書館に保管されている。近世ヨーロッパの数多の学者たちと同様にハーダーは現在では忘れ去られた人物である。だがその経歴は興味深い。彼は一六六九年一月にライデン大学でアラビア語を講じる許可を得たが、間もなくその職を辞し、イスタンブルで不帰の客となった。

ハーダーの遺稿はさまざまな言語で書かれた数多くの書類からなる。そこにはハーダーによるラテン語の原稿——例えば「アラビア語の起源 (*Origines lingue Arabicæ*)」に関する小論やクルアーンのラテン語抄訳など——に加えて、アラビア語、ペルシア語、オスマン語で書かれた著作の抜粋や書簡の下書き、そして先述の写本目録などが含まれている。これらの書類のすべてがハーダーによって作成されたわけではない。のちにバーゼル大学でイスラーム学を講じたフリッツ・マイアーは、あるアラビア語の献辞に注目し、ハーダーの遺稿の大部分がイブン・アル＝サフリ（Ibn al-Safarī）なる人物によって筆写されたと考えた。デンマーク王フレデリク三世へと献上するクルアーンに添えるべく認められたこの文章は、一六六四年、ライデンで「イブン・アル＝サフリ」として知られるムクダスィー・アター・アッラーによって署名されている。この献辞の筆跡に基づいて、マイアーは、冒頭で触れたヴァルナーの写本コレクションの目録もまたイブン・アル＝サフ

リーによるものであると推測した。

しかしこの推測には留保が必要である。イブン・アル＝サフリーに帰された筆跡は、実際はシャーヒーンの筆跡に他ならない。さらにハーダーの遺稿群にはシャーヒーンの筆跡で書かれた免状（*waṭiqā*）が存在する。その書き手によれば、ハーダーは自らのもとでアラビア語を学んだという。この免状がシャーヒーンによって作成されたとなると、ハーダーは彼にとつての生徒であったことになる。おそらくはこの師弟関係の故に、シャーヒーンが作成した目録もまたハーダーの手に渡り、彼の遺稿とともにバーゼルへ到来したと考えられる。

とはいえシャーヒーンは未だ多くの謎に包まれている。彼がライデン大学の東洋語教授ゴリウスやハーダーのために写本を複製したことは知られているが、写字生としての彼の活動の全貌は明らかでない。あるいは、彼が故郷のアレッポから遠く離れたオランダで置かれた環境はどのようなものだったのだろうか。こうした問題に答えるには、ヨーロッパ各地に散在する、シャーヒーンが筆写した写本や彼に関連する文書をつなぎ合わせて分析する必要がある。

シャーヒーンに注目することは、ともすればヨーロッパ人による発見の物語として語られてきた東洋学の歴史において、オスマン帝国出身者が演じた役割を再考する糸口となるはずである。さらには文化や言語の境界を超えてヨーロッパへ旅し、異邦人として生きた者の物語もまた、断片的にはあられ、再構築できるものと期待したい。

（山口大学人文学部講師）

初期伊万里誕生

藤原友子 ふじわら ともこ

(佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長)

佐賀県立九州陶磁文化館は、昭和五五年（一九八〇）十一月一日に開館し、令和七年（二〇二五）には四五周年を迎える。開館以来、九州陶磁のなかでも館の所在地である有田を中心とした陶磁器について調査・研究・収集を進め、とくに江戸時代の肥前陶磁器（古唐津・古伊万里など）を体系的に展示している。

日本で初めて「磁器」を焼いたとする佐賀県有田町に位置し、九州・沖縄各地の陶磁器をテーマに展示を行っている。

このたび、一〇月四日から一二月七日の会期もって開館四五周年記念の、初期伊万里をテーマとした特別企画展覧会を開催する。初期伊万里とは、初期の伊万里焼、つまり有田を中心とする肥前窯業圏の中で誕生した最も古い時代の磁器を指す。これらの磁器製品は、誕生した江戸時代に伊万里の港から出荷されたため、日本国内で「伊万里焼」と呼ばれていた。製品を扱う商人が伊万里の港に集中していたこともあり、主たる生産地であった「有田」ではなく通商港が認知され、陶磁器を指す語として定着した。現

在の伊万里市を産地とする伊万里焼との混同を避けるため、古いもの（当館では江戸時代のもの）に「古」の字をつけて「古伊万里」と呼ばれる。

さらに、古伊万里の中でも、初期のものは現在「初期伊万里」として区分されることが多い。この語そのものは、大戦前の昭和初期からみられるが、実際に特徴とともに古陶磁研究者や愛好者の間で使われ始め、定着していったのは昭和三〇年前後（一九五〇年代）とされる（永竹威編『肥前陶磁の系譜』一九七四年、二六四頁）。有田の磁器発祥の窯場と考えられていた有田の天狗谷窯跡の発掘調査（一九六五年）もあり、初期伊万里の製品の特長が明示されていた。そのころから、初期伊万里の作例は、初期に特徴的な製造技法とともに理解されている。それらは、一、素焼きをせず、施釉は生掛けによる。二、そのため、釉薬は厚くかかり、往々にして高台の脇などに指をあてた痕跡などが残る。三、その厚い釉調は不安定で青灰色の混濁がみられる。このほか、皿であれば、四、器



染付蓮文皿

有田 1610～1630年代

口径17cm

佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

山口陽二氏寄贈

壁が厚く、高台が小さい。五、染付文様の筆線は太く、のびのびとしている。など、のちの時代の製品との差異をもって特徴づけられ、そうした「初期的」な技法からくる力強さやのびやかさに魅了され、初期伊万里をテーマに収集する古陶磁愛好家も多い。

初期とは、実際いつごろのことなのかについては、古文書や古記録は少なく、断片的な記録だけで実像がつかめない。このことから初期伊万里研究は、考古学的な資料比較によるアプローチ、文献史学、美術史学など、複合的に研究が進められてきた。一方で、大正期頃に形成された創始の説は定説化し、「一六一六年に朝鮮人

陶工李参平が泉山で良質な陶石を発見し、天狗谷窯で開始した」という言説は、長年語られてきた。現在では、研究者の間で一六一六年が陶石発見の年なのかどうか、「李参平」という朝鮮名、天狗谷窯が創始の窯であるかどうかについて見直しがされている。

唯一、金ヶ江三兵衛（朝鮮名が李参平とされてきたが、後世の文書で、李某という記録に「参平」という名を当てたことから定着したと考えられる）本人の語りを伝える文書の写し（皿山金ヶ江三兵衛兵高麗より罷越候書立、『肥陽舊章録』佐賀大学附属図書館所蔵 小城鍋島文庫）が語るところによると、多久長門守（多久安順）に仕えていたが、三十八年前の丙辰の年（元和二年（一六一六）と解釈される）に有田に移ったこと、多久から同様に朝鮮人陶工を連れてきたこと、金ヶ江三兵衛が金銭を介して佐賀本藩士が抱えていた唐人（朝鮮の人と解釈される）や有田、伊万里の人々を引き取って仕事をしている（総勢二二〇人）ことなどが示されている。金ヶ江三兵衛が、有田の草創期の陶業に従事していたことが改めて確認できる。

有田の磁器産業が、朝鮮の陶磁器技術を基底として誕生したことは窯や窯道具などから明らかであり、文禄・慶長の役によってもたらされたものである。しかしながら、朝鮮半島の陶磁器製品から出発しながらも、主力製品は朝鮮陶磁のようなものではなかったことも明らかとなっている。

文禄・慶長の役の頃の朝鮮半島の磁器は、無文様の白磁（硬質白磁と軟質白磁）が生産されていた。官によって監督されており、地域性が希薄で、個性性ともいえるべき生産状況にあった。法によって定められたシステムで、交替で官窯に陶工が入職して賦役にあた

り、王宮が志向する清冽な白磁が上級品とされ、それに倣った白磁が全国で製作されていた。したがって、初期の陶工らは日本市場が好む染付磁器や、食文化や茶の湯に応じた器をもって市場に参入する必要があった。有田では、初期のころから、染付磁器を主力生産している。中国の文様を写した製品も見られるが、中国から輸入された画譜『図絵宗彝』や『八種画譜』から抜き取った文様も知られている。抜き取った文様には、「倣筆意」という「絵師の筆の意に倣って描いた」という文言を入れている。

ここに紹介する館蔵品は、蓮が文様として採用され、「倣筆意」の語とともに描かれている。画譜のなかに一致するものは未だ発見されていないが、『八種画譜』の「草本」に「蓮花六種」と題した挿絵があり、中国絵画風の画題として翻案された文様と考えられる。絵の線は力強く、釉薬は厚くかかり、全体は灰色がかった色みを呈している。この特徴は初期のものに典型的なニュアンスであり、一つのスタイルとみて「初期伊万里様式」という用語も派生している。

蓮の文様は、東アジアの文化圏で広くみられるが、この皿の文様表現はユニークである。葉を大きく中央に描き、既に花卉が散った花托をまっすぐに天に伸ばし、左右に蕾、添え物の種類不明の植物の葉が描かれている。やはり、絵手本からの翻案であることが推測され、先に挙げた画譜以外にも原典となるものがあったのだろう。周辺は菊の花を半分にした半菊文と通称される文様で囲んでいる。半菊文は、初期伊万里には多くみられる文様であり、中国的な雰囲気なたえながらも、日本の好む文様を試行錯

誤していた時代性が表れた作例といえよう。

初期伊万里の生産は、それまでの日本に存在しなかった技術によって突如として開花した。そこには、朝鮮出兵という、人や物の略奪という歴史を抜きにして語れない。しかしながら、朝鮮陶磁に見られない型を用いた技術、掻き落とし、吹き墨などの装飾技法も急速に展開し、有田の地で爆発的に生産が発達した。本展覧会は、草創期に焦点をあて、日本磁器の開発から発展の真相に迫るものである。

佐賀県立九州陶磁文化館

【所在地】

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-4
Tel: 0955-43-3681
ホームページ: <https://saga-museum.jp/ceramic/>

【交通アクセス】

有田駅(JR九州・松浦鉄道)から徒歩約12分
波佐見・有田インターチェンジから車で約10分

【特別展】

開館45周年記念 特別企画展
初期伊万里ビッグバンー日本磁器始まりの全貌ー
2025年10月4日(土)～12月7日(日)

【開館時間】

9時～17時(入館は16時30分まで)

【休館日】

月曜日(祝日は開館し、翌日休館)

【観覧料】

上記特別展観覧料金 一般 800円 団体 700円
高校生以下及び障害者手帳又は指定難病受給者証をお持ちの方とその介助者(1名)は無料

※展覧会・イベント日程、休館日などの情報をホームページでお伝えしています。

▼今回のいいーたいむでは、幕府天文方が文書作成に勤しむ日常が話題となりました。組織のトップである天文方には、プロジェクトリーダー的な側面もあったとのこと、これは私がこれまで接してきた、洋学史や科学史の研究から受ける天文方像にはない姿でした。天文方もまた、人間社会のなかで生きていたのだと、改めて感じました。私は研究から滲み出てくる、こうした人間臭さに魅力を感じます。さて、天文方の初めての通史的、総合的研究である本書には、さまざまな発見があると思います。新たな史料の発見もありました。どうぞご期待ください。

▼ところで、今秋冬の刊行予定には、奇しくも『簠簋内伝金鳥玉兔集』の研究『江戸の実景を記録する』『帝国の気象学』と、暦・測量・気象などを扱い、天文方の前史やその後に連なる書籍が並びました。それぞれ異なる分野の研究ですが、数珠つなぎに読んでいただくと、見えてくるものがきつ々しいと思います。

▼大阪・関西万博も終盤。『万博学／Expo-logy』の特集は、万博学研究会メンバーによる、いわば万博クレイジージャーニーの記録集です。多様な視点からの25の論考をぜひお楽しみください。

▼前号「本屋さんになりたい」七歳娘に複数の反響。五つの書店が密集する商店街の近くで成長中。お菓子の缶を開ければ、まず説明の栞を読んでもうっとり。情報が詰まった栞はクッキーより甘いのか!? (R)

▼サラマンダーを飼い始めました。西洋の物語によく出てくる火の精霊……ではなく、水辺に棲む山椒魚のほうです。あまりの愛らしさに公私混同して、いつか山椒魚の本を作りたいなあと夢想しています。(N)

▼編集後記なるものを書くのはいつぶりだろうと振り返ると、中学の校内新聞の編集局員をしていた時以来でした。本誌のなかの2／3頁分を担当しただけですが、仲間入りさせてもらえて嬉しく思います。(TS)

▼和菓子が好きなのですが、いつも買っていたコンビニの塩豆大福と羊羹を見かけなくなりショックを受けています。せっかく京都ににいるのだからきちんとお店で買いたさい、ということかもしれません。(e)

▼表紙図版・クニッピンが作成した日本初の印刷天気図(一八八三年四月一日、気象庁HPより)

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.121

2025(令和7)年9月25日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町335

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/>

表紙デザイン HON DESIGN

芳澤勝弘（花園大学国際禅学研究so顧問）著

一休、胡乱を生きる 『一休和尚年譜』を読む

9月刊行予定

A5判上製四二〇頁／定価二一、〇〇〇円

芳澤勝弘編著 江月宗玩原著

江月宗玩 欠伸稿訳注 乾・画賛篇

乾定価一〇、四五〇円／画賛篇定価八、八〇〇円（坤品切）

上川通夫著

民衆仏教の形成と

日本中世

【思文閣人文叢書】

定価二一、〇〇〇円



十五世紀、一休宗純が生きた時代は、足利義満の治世に始まり、嘉吉の乱、応仁・文明の乱へと続く激動期にあたる。本書は、一休研究の基礎史料である『一休和尚年譜』の詳細な訳注に加え、『狂雲集』『自戒集』、墨跡や同時代の古記録を駆使し、一休の生涯を時代の中に位置づける。京の都で万単位の僧侶が武装して主張を展開し、放火や殺人が横行する異常な社会の中に置くと、一休の破戒と風狂は新たな意味を持つ。禅宗研究のみならず、室町時代史としても意義深い一冊。

【目次】

はじめに／関係人物生没年一覧

『一休和尚年譜』訳注

明徳五年（三九四）～文明十三年（四八二）

【補説】

六歳までどこで生活していたのか／室町時代における兼弘の実際／若き一休の悩みは何だったのか／真珠庵建立について／寛正の大飢饉／慈楊塔命名の因由

【付録】

「祖心紹越置文」（酬恩庵蔵）／祖心紹越「二休宗純遷化記録」（真珠庵文書「一三三」号）／一休の遺偈・辞世／東陽英朝「少林無孔笛」所収の「一休和尚人牌祖堂」

解説／索引

大徳寺の復興に尽くした江月宗玩（1574-1643）の語録『欠伸稿』の龍光院蔵自筆本を翻刻。影印で刊行されている写本「孤蓬庵本」のほぼ半分だが、「孤蓬庵本」にはない偈頌などを収録。多くの文化人との交流も記録されており、貴重資料ともなっている。画賛篇に、「仏祖賛」「賛」部の訳注を収める。

国家宗教として日本に導入された仏教は、中世にいたって広く社会に定着したとされる。ただし中世仏教は、権門体制論や顕密体制論において、権力側が民衆を編成し、抑圧する装置としての側面が強調されている。はたして中世の民衆は仏教を押し付けられただけの存在なのか？

本書は、民衆自身の生存と権力支配への抵抗を求める普遍的な思想が、仏教の用語や思想（慈悲、不殺生、和合など）と接することで表現された可能性を追求する。断片的ながら願文、起請文、村の禁制、地域の小規模寺院の存在などに史料の痕跡を見出し、民衆思想として萌芽した状況を浮かび上がらせる。

表示価格は税込

住友史料館編

住友史料叢書 38

主管者協議会議事録二

一六二〇年代から大坂で銅の精錬を業とし、一時世界銅産市場においても重要な位置を占めた住友家は、その後金融・貿易などをも手がけ、近代の財閥につながる豪商の典型である。その鉅業史料は、質・量ともにわが国屈指の基本史料であり、本叢書は一万数千点にのぼる近世史料のうち、重要で継続する記録類を中心に編纂、第1期、第6期、各期全6冊を刊行してきた。第7期からは、近代財閥として多角的に成長を遂げる、近代史料のなかから重要な史料を選び、全6冊を刊行する。

12月刊行予定

A5判上製・約四二〇頁／定価 一、〇〇〇円

末岡照啓著

徳川幕臣団と江戸の金融史

―札差・両替商の研究―

A5判上製・四〇〇頁／定価八、八〇〇円

牧知宏著

近世京都における都市秩序の系譜

A5判上製・五六八頁／定価一〇、四五〇円

徳川幕臣団（旗本、御家人）の俸禄米を担保とした貸付けによって家計を支えた札差、旗本知行所の年貢米を受けとり家計の面倒をみた両替商など、江戸の有力商人の経営実態について、幕府の金融政策を通して分析。従来の高利貸しと困窮する武士といった画一的なイメージを超えて、幕藩体制を維持するために幕府、幕臣団、有力商人たちがそれぞれと思惑を抱きつつも、相互に依存する関係性を浮かび上がらせる。また研究史上、上方に比べて軽視されてきた江戸の金融史の再評価も企図する意欲作。

現在の京都市中心部のいわゆる「田の字地区」が上京区・中京区・下京区の三つの行政区に分かれるのは昭和四年からで、その歴史は100年にも満たない。かつては上京・下京の二つに分かれていた地域概念は、中世末から近代へとつながるが、近世においても様々な展開を経ることになった。本書では、「町」・「町組」・「惣町」という重層的な内部構造を持っていた近世京都における「惣町」（上京・下京）に着目し、京都住民と奉行所との間の行政上の関係だけでなく、近世を通じて行われ続けた徳川將軍家との間の儀礼関係も含めて分析することで、近世京都の都市秩序の系譜を明らかにする試みである。



表示価格は税込

飯沼賢司（別府大学名誉教授）著

八幡神からみる

日本古代の政治と社会

—新たな八幡信仰史の視座—

11月刊行予定

A5判上製・約五三〇頁／定価 未定

現代においては全国に4万社以上あるといわれる八幡宮。その祭神である八幡神は、ヤマト国家の周縁部豊の国「くにさき」半島の付け根、宇佐の地で出現した。本書は、九州の辺境に出現した神がなぜわずかな間に国家神に踊り出たのかという謎を紐解く。文献史料に加えて八幡宮の祭礼や伝承から当時の政治や社会状況をよみと き、八幡神は時の政権と密接に関係する、歴史を写す鏡のような神であることを明らかにする。その政治性こそが八幡神の本質であると論じる本書は、既存の八幡神研究とは異色のものである。

金玄耿著

中世的身分秩序と家格の形成〔30s〕

「貴種」「公達」「良家」という3つのキーワードを中心に、史書や古記録のみならず、詩序や南都寺院の文献など多様な史料を活用し、それらに表れた貴族の出自や身分に関わる言葉を辿っていく。

定価 九、三五〇円

飯沼賢司編

阿蘇下野狩史料集

しものかり

阿蘇の五岳の西山麓に広がる広大な原野、下野。そこで中世に行われた「下野狩神事」の史料である、永青文庫所蔵『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』とその関連文書、阿蘇家所蔵下野狩関連史料を翻刻。

定価 八、二五〇円

〔目次〕

序章

第一部 八幡信仰の成立と展開

第1章 奈良時代の政治と八幡神

第2章 僧法蓮から見た八幡神論—法蓮と八幡神の出会いから国家神への道を読み解く—

第3章 八幡大菩薩成立の歴史的背景—聖武天皇の国家構想と関連して—

第4章 宣と龜卜の対決

第5章 八幡宮における二つの「比売神」成立の意義

付論 「八幡神」からみた「民族」「国家」の問題について

第6章 御霊信仰のはじまりと八幡信仰の新展開

第7章 権門としての八幡宮寺の成立

第8章 古代における八幡神と信仰のひろがり

第9章 宇佐宮放生会を読む

第10章 宇佐宮行幸会を読む

第11章 「鍛冶の翁」と「炭焼小五郎」—伝説の実像—

第12章 八幡神と神輿の成立

第13章 宇佐八幡宮の遷宮の世界を読む—杣始の神事と杣山

終章

山下克明（大東文化大学東洋研究所兼任研究員）著

『簠簋内伝金烏玉兎集』の研究

その成立と中世仮名暦の展開

11月刊行予定

A5判上製・三八四頁／九、九〇〇円

『簠簋内伝金烏玉兎集』は安倍晴明撰に仮託され、中世から近世にかけて広く流通した暦書であるが、従来その成立背景は不明のままであった。

本書は多彩な史料と詳細なテキスト分析をもとに、天台顕密仏教圏で仏教・午頭天王信仰と暦が結びつき、『簠簋』が成立したこと。それと共に、その狙いが各地で普及し始めた中世仮名暦を通した、仏教化の拡大にあったと指摘。また、これに対抗して「摺曆座」（大経師暦）を立ち上げた暦道賀茂氏の動向も詳論して、中世における暦をめぐる動態を明らかにした。

さらに古態本の翻刻・書き下し文、古活字版の影印も収録。『簠簋』研究の基本図書にして、決定版である。

山下克明著

平安時代

陰陽道史研究

宗教としての陰陽道のあり方、活動の実態とその浸透、彼らの信仰などをさまざまな角度から明らかにする。

定価 九、三五〇円

新見まどか著【好評増刷】

唐帝国の滅亡と

東部ユーラシア

—藩鎮体制の通史的研究—

長らく停滞していた藩鎮研究に新たな光を当てることで、「その後」の唐を支えた藩鎮体制を再評価。

定価 九、三五〇円

【予定目次】

第一章 『簠簋内伝金烏玉兎集』の成立と仏教

- 第1節 簠簋とはどのような書か
- 第2節 牛頭天王と密教
- 第3節 暦の主宰者牛頭天王
- 第4節 祇園社と簠簋の関わり

第二章 『簠簋内伝金烏玉兎集』の諸本—古態本の検討

- 第1節 簠簋の諸本
- 第2節 古態とその整理
- 第3節 簠簋の「暦道」観

第三章 中世仮名暦と『簠簋内伝金烏玉兎集』

- 第1節 中世仮名版暦の展開
- 第2節 陰陽道にない凶日の流行
- 第3節 簠簋暦注の社会的影響

第四章 暦道賀茂氏の滅亡と近世の仮名暦

- 第1節 暦道賀茂氏による簠簋への対策
- 第2節 賀茂氏の滅亡と編暦者の移動
- 第3節 地方暦と暦注の統一

史料篇 古態本系天理図書館楊惠本『簠簋内伝金烏玉兎集』本文校訂、書き下し文
慶長十七年古活字本『簠簋内伝金烏玉兎集』第一冊巻一・巻二影印

井戸美里編

名所の誕生

「名」を与えられた風景

土地が「名所」となる過程を明らかにすることで、そのなかに時代や土地を超えて存在する普遍性、「名」の本質を探る。

定価 八、八〇〇円

荒木浩編

《無常》の変相と未来観

—その視界と国際比較—

「無常」概念にとどまらず、《ゲローバル》なヘアジヤ」の中の日本古典文化の解明を目指す。

定価 一六、五〇〇円

表示価格は税込

佐藤賢一（電気通信大学教授）・梅田千尋（京都女子大学教授）・
平岡隆二（京都市立大学准教授）編

幕府天文方の研究

今冬刊行予定

A5判上製・約五〇〇頁／予価八、八〇〇円

江戸幕府の天文方は、貞享元年（一六八四）の貞享改暦後、渋川春海が就任したことに始まり、その役割は時代の要請に応じて多方面に拡張した。そのため研究史上の天文方像は、論者の専門、関心により多様であり、意外にも全体像が語られてこなかった。本書は、新史料も利用し、天文方の草創期から終焉に至るまでの変遷を、天文暦学史のみならず、陰陽道史、和算史、洋学史、測量術史、思想史など多様な切り口から総合的に概観する。天文方を初めて通史的、かつ分野横断的に分析する画期的な一冊。

松浦清・真貝寿明編

天文文化序説

分野横断的にみる歴史と科学

天文現象は文明の誕生以来、実用的な学問を成立させ、宗教を創出し、多くの芸術を生みだしてきた。一方で現代の天文学は、学問として細分化されすぎてしまった面もある。本書では『天文文化』と命名する文化史・科学史の融合分野の創設を志し、文理にまたがる視点からの論考を掲載する。

定価 一〇、四五〇円

【予定目次】

- 序 天文方に至るまで―貞享改暦と天文方の役割
- 第1章 天文方に至るまで―貞享改暦と天文方の役割 (佐藤賢一)
- 第2章 渋川春海の改暦と神道―保科正之・山崎闇斎との関係 (梅田千尋)
- 第3章 幕府天文方と和算家のネットワーク―建部賢弘から山路主住まで (林淳)
- 第4章 徳川吉宗の数理科学書収集と長崎聖堂―『暦算全書』初渡来とその背景 (佐藤賢一)
- 第5章 『渋川氏記録』と明和期の天文方―執務形態と養子問題を中心に (平岡隆二)
- 「コラム1」 幕府天文方と久留米藩の和算家 (武正泰史)
- 第6章 寛政の改暦から天保の改暦へ (嘉数次人)
- 第7章 寛政改暦以降の頒暦と天文方 (梅田千尋)
- 「コラム2」 『暦記録』にみる天文方の江戸暦出版への姿勢 (小田島梨乃)
- 第8章 越中筏井家文書に見る高橋家と和算家との関係 (佐藤賢一)
- 第9章 阿蘭陀通詞と幕府天文方―馬場佐十郎を中心に (大島明秀)
- 第10章 天文方による外交業務の展開―文化・文政期を中心に (松本英治)
- 「コラム3」 幕末の彗星観測 (岩橋清美)
- 第11章 開陽丸引き揚げ文書について―幕府天文方と開陽丸 (佐藤・梅田・平岡)
- 終章 幕府天文方の終焉 (佐藤賢一)

洋学史学会 監修／青木歳幸、海原亮、沓澤宣賢、佐藤賢一、
イザベル・田中・ファンダーレン、松方冬子編

洋学史研究事典

グローバルな社会における洋学史研究の成果を盛り込んだ最新の研究事典。地方誌類の編纂事業や地域史研究の隆盛を踏まえ、全国各地に蓄積された洋学史の研究成果を収録。洋学史に関心・かわりのあるすべての方へ、これからの研究の指針となる必備の書。

定価 一四、三〇〇円

表示価格は税込

西山剛著

輿をかつぐ人びと

— 駕輿丁・力者・輿舁の社会史 —

第20回林屋辰三郎藝能史研究奨励賞受賞

A5判上製・四一六頁／
定価 九、〇〇〇円

館野まりみ著

女かぶき図の研究

〔思文閣人文叢書〕

第20回林屋辰三郎藝能史研究奨励賞受賞

A5判上製函入・三四八頁／
定価 七、七〇〇円

輿を昇くという行為そのものの社会的な意義とは何か。

本書は、前近代社会における職能集団のなかでも、天皇や将軍、公家や武家、有力な寺院や神社など、各権門の有力者の移動に際して輿を昇き、その移動を直接的に担った人々を対象とし、その存在形態および実態を、中近世を通じて長期的なスパンで考察し明らかにすることを目的とする。行幸や北野祭祀に輿舁として勤める禁裏駕輿丁、祇園会の神輿駕輿丁や山道での職能をもつ八瀬童子、天皇の葬送儀礼に関わる大雲寺力者など、異なる社会層の中で活動する「輿舁」の実態に光をあて、諸側面を比較することで、「輿舁」がいかなる身分であり、社会の全体構成のうち、いかなる位相に位置されるのか、さらにはその職能の実態や社会的機能について探る。

お国によって始められたかぶきは、その後、遊女たちによって模倣され、十七世紀初頭の京都を中心に地方に拡がった。近世の幕開けとともに絵画史に新しい画題やモチーフを提供することとなったお国や遊女によるかぶき―すなわち、女かぶき―は、どのような意味や役割を担って描かれたのか。同時代の鑑賞者はそれをどのように捉えたのか。まず、女かぶきの演目とその変遷の経緯を整理し、描かれた芸態の意味を読み解く。次に、女かぶきを取り上げる絵画の真の主題と制作意図や背景、絵師や注文主と鑑賞者を探り、さらに、次世代の婦女遊楽図とのつながりを示す。その上で、遊楽図再考に向けて試論を提示する。

東寺文書研究会編

東寺執行日記 全三巻

定価 各一五、四〇〇円
(第二巻はオンデマンド版)

東寺長者系列の寺内の要職である執行の公務記録。本シリーズではその中世部分を翻刻する。

桃崎有一郎著

定価 九、三五〇円

鎌倉幕府礼制史―儀礼論と組織論

『大盤振舞』の語源となった鎌倉幕府の共食儀礼「塙飯」を徹底的に分析し、法を補完する礼の役割を解明しつつ、全く新しい鎌倉幕府像を導き出す。

宮川卓也（広島修道大学准教授）著

帝国の気象学

—近代日本の気象観測網と「日本気象学」の構想—

12月刊行予定

A5判上製・約四〇〇頁／定価七、一五〇円

一九世紀半ば、西欧各国が全世界に支配領域を広げつつあった時代、幕末の日本でも、訪日西欧人らによる気象観測が始まった。お雇い外国人らの助力もあり日本の気象学は緩やかに深まっていくが、一九世紀末以降、三度の戦争を経てそれは飛躍的な発展を遂げる。天気予報の精度は、観測網の広さと比例する。より正確な予報のために観測網の拡張を求める気象学者たちと、戦争遂行と植民地拡大のために正確な気象情報を求める軍部との相性は、いわば抜群だった。

そして気象学は、ナショナルリズムの機運高まる日本で、ある種のガラパゴスの発展を遂げる。当時の気象学者たちが目指した「日本気象学」とは如何なるものだったのか。近代気象学の始まりと発展、そして終焉と再出発を体系的に論じる初の学術書。

松田利彦・陳延潔責任編集／通堂あゆみ・やまだあつし・鄭駿永編集委員

植民地帝国日本とグローバルな知の連環

—日本の朝鮮・台湾・満洲統治と欧米の知

西欧の知と帝国日本の知の交錯、そして西欧の知を淵源とする日本人と被支配民族の知の対抗／協調／変奏関係を読みとく。

定価 一五、四〇〇円

【予定目次】

はじめに

序章 気象学と帝国、植民地

第一部 日本気象事業の胎動

第一章 「植民地」日本の気象観測

第二章 明治初期における国内気象事業の編成と拡充

第三章 「植民地」日本の気象・気候研究

第二部 帝国気象観測網の構築

第四章 日清・日露戦争と植民地気象事業

第五章 日清・日露戦争と植民地気象事業の開始

第六章 植民地気象事業と東アジア気象観測網の構築

第七章 植民地気象調査と植民地の知の動員

第三部 「日本気象学」の形成と周縁性の克服

第七章 梅雨研究

第八章 台風研究

第九章 気候論

第四部 戦争と気象、帝国後の気象

第一〇章 満洲国気象観測網と軍事的再編の出現

第十一章 帝国観測網の戦時改編

第十二章 戦時体制下の気象学研究

第十三章 帝国解体後の気象観測網

終章 「帝国の科学」としての気象学

鈴木英明編

移動の文明誌

—「自由」と「不自由」の狭間で

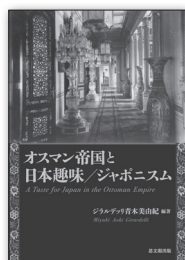
移動を、関係性の構築・再編の契機と捉え、人の具体的な移動を多様な学問的手法と問題関心で解剖する。

定価 九、九〇〇円

表示価格は税込

ジラルデッリ青木美由紀（美術史家）編

オスマン帝国と 日本趣味／ジャポニスム



表示価格は税込

10月刊行予定

A5判上製・三三四頁／本体七、一五〇円

フランスを中心にジャポニスムが流行した時代、日本趣味の美術工芸品はアジアとヨーロッパにまたがるオスマン帝国の諸宮殿にももたらされ、宮廷を彩っていた。これらの品々はボスフォラス海峡に臨むイスタンブールの地に、どのような経緯で、いかにしてもたらされたのか？日本製あるいは外国製による日本趣味の美術工芸品を陶磁器・金工・刺繍・寄木細工等の専門家が現地調査した成果をもとに、草創期の日本・トルコの交流、そしてヨーロッパ周辺に及んだもうひとつのジャポニスムの諸相を明らかにする。

鈴木達也著 [Shibunkaku Works]

キセルと喫煙の歴史

—日本への伝来、海外への伝播—

A5判上製・約二八八頁
予価四、四〇〇円

本書では、欧州のタバコ史・喫煙史をふまえた上で史料・古文書を読み解き、オランダ船がわが国へ初来航する以前からオランダの「金属パイプ」が日本で呈示されていたことを示した。さらに、「金属パイプ」が日本で「キセル」として定着した後、東南アジア・シベリアへの伝播の様相を示し、わが国が発信地となる「キセルの伝来と伝播」の正確な様相を明示した。

【予定目次】

総論 オリエンタの東—オスマン帝国と日本趣味／ジャポニスム

ドルマバフチェ宮殿の「SATSUMA」

日本磁器の始まりとトルコの近代宮殿所蔵有田磁器の特色

「コラム1」万博を通じた日本工芸品の広がり—有田焼の場合

「コラム2」ドルマバフチェ宮殿が収蔵する寄木のライティング・ビュロー

（李亨 皓彦）

ドルマバフチェ宮殿の日本製金工品

「コラム3」トルコのコーヒー文化

「コラム4」イスタンブールのジャポニスムとアール・ヌーヴォ

オスマン帝国の宮殿を彩った日本の刺繍

「コラム5」東から西から—イスタンブール来訪貴顕人名録

「コラム6」山田寅次郎—日本とトルコの友好の礎を築いた男

近代オスマン宮廷の美意識と日本

③ジラルデッリ青木美由紀

（逢辺芳郎）

（大橋康二）

（藤原友子）

（李亨 皓彦）

（清水克朗）

③ジラルデッリ青木美由紀

（松原史）

③ジラルデッリ青木美由紀

（田有史）

③ジラルデッリ青木美由紀

松原史著

刺繍の近代

—輸出刺繍の日欧交流史—



日本の近代刺繍が花開いたおよそ50年間について、現存する作品を網羅的に調査し、刺繍産業の状況を具体的に描き出し、日欧間でどのような影響を与えたのかを明らかにする。

定価九、九〇〇円

万博学会／Expo-logy

第4号

【特集】万博学会で考える

二〇二五年大阪・関西万博

12月刊行予定

A5判上製・約二〇〇頁／予価二、七五〇円

多彩な専門を有する万博学会の25人のメンバーが、25の視点、関心から大阪・関西万博を熱く、深く、ときに時空を超えて語りつくす、世界中で本誌でしか実現しない総力特集号。さらに、新進気鋭の若手研究者による最新の研究を収録する。

【既刊案内】（電子版有）

創刊号 【特集】植民地なき世界の万博 定価…二、二〇〇円
第2号 【特集】万博と冷戦 定価…二、二〇〇円
第3号 【特集】大阪万博前後の世界 定価…二、七五〇円

佐野真由子編 【好評2刷】

万博学会—万国博覧会という、世界を把握する方法

万国博覧会のさまざまな側面に着眼し、掘り下げたその先に、人類世界の歩みを浮き彫りにする。

定価 九、三五〇円

【予定目次】

【特集】万博学会で考える二〇二五年大阪・関西万博万博

万博会場で世界の科学技術の「いま」を見る、ただし八時間で。視覚と触覚—ポスト「映像博」の模索

未来に残す大阪・関西万博の資料

夢洲にて、かく語りき—会場からの新たな発信法

オーストラリア館のバーゼンドルフアーヒアノをめぐって

会場の配置図からは見えない世界

万博の記憶—一八五—二〇二五年

二〇二五年の万博から未来を問う

未来の覧会屋へ

宗教文化から見る万博

万博における共創の場としてのコンモンズ館—展示支援実務の経験から

統一テーマは必要なのか—私たちにまだまだ言うことがある

テーマ事業のプロデュースシステムが起こした「感染」現象

万博の目玉展示は変わったか？

何が日本を伝えるのか

カナダ館のアン

法沢栄—の二〇二五年万博訪問記

現代におけるバリ万博の不在—一九八九年と二〇二五年の計画

遺産（レガシー）をめぐって

見えない統合、見えない危機—二〇二五年のヨーロッパ像

お祭り広場とシャインハット

貴賓きたる！大阪・関西万博

「平和的抵抗」としての万博—「パレスチナはここにいる」という宣言から

万博の残影—工芸文化の継承

「展示デザイン」の変遷からみる日本館

【万博学会の最前線】

最小の国家が内包する「全世界」—一九三七年パリ万博パチカン館における宣教の展示（古沢ゆりあ）

一九世紀万博とイラン国王ナサーセロッティーン・シャールの旅行記（寺田悠紀）

寺本敬子著 【好評5刷】

パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生

開催国フランス、参加国日本、パリの観衆、三者の相互作用を通じてジャポニスムの誕生を解き明かす。

定価 七、一五〇円

表示価格は税込

杉山卓史（京都大学准教授）著

「われ感ず、 ゆえにわれ在り」 の美学

—ドイツ啓蒙主義における
「感情」と「感覚」の系譜

12月刊行予定

A5判上製・約二六〇頁／定価 八、二五〇円

石川義宗著

シェーカー教徒の思想とデザイン —祈りの中の家具と建築

シェーカーが書き残した教義などを読み解くことで、彼らの家具や建築が祈りの表現であったことをデザイン学の観点から論じる。

定価 七、七〇〇円

一八世紀、バウムガルテンの手により誕生した美学は、当初「感性の学」として構想された。しかしその後ヘーゲルらによる再編を経て、「美」や「芸術」の哲学へと変容していく。

本書はそうした歴史的展開を踏まえつつも、一八世紀ドイツに端を発する美学の原点に立ち返り、「感情／感触 (Gefühl)」と「感覚 (Empfindung)」という二つの概念に光を当てる。カント、ヘルダー、メンデルスゾーンらの思想のなかで、これらの概念はいかに捉えられ、そしてどのように美学の理論形成に寄与してきたのか。さらには、アカデミーの懸賞課題や翻訳といった当時の外的要因、実際の芸術現象たる多様様式的分析など、多角的な視点からその展開を探りつつ、現代の美学的議論や認知科学にも通じる知的地平を拓く。

【予定目次】

プロローグ

第Ⅰ部 感情

- 第1章 ヘルダーにおける「われ感ず、ゆえにわれ在り」
- 第2章 美的判断における自己触発
- 第3章 近世美学における「心臓の言語」
- 第4章 「Gefühl」は「触覚」か（いつから）「感情」か

第Ⅱ部 感覚

- 第5章 メンデルスゾーンの感覚論
- 第6章 ヘルダーの感覚論―「認識と感覚」の同時代的位置
- 第7章 カントの感覚論―ゼンメルリンクとの対話―
- 第8章 ヴィンケルマンの感覚論―「感覚能力論」読解の試み―
- 第9章 「Empfindung」概念小史
- 第10章 「多様様式」をめぐって

エピローグ

ジャポニスム学会編

ジャポニスムを考える

—日本文化表象をめぐる他者と自己

日本の外からあるいは日本の外を意識してイメージされた「日本文化」を研究する問題点と可能性を、ジャポニスム研究をリードする学者らが提起する。

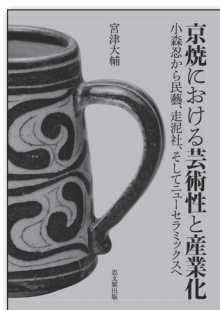
定価 三、五二〇円

宮津大輔（横浜美術大学教授）著

京焼における

芸術性と産業化

—小森忍から民藝、走泥社、
そしてニューセラミックスへ—



9月刊行予定

A5判上製・三三四頁／定価七、七〇〇円

近代京焼には、古都としての歴史性を背景に、登り窯を中心とした制／製作者による緊密なコミュニティや、数理的思考の涵養と技術・情報ハブとして機能した京都市立陶磁器試験場の存在など、独自の進化・発展因子が形成された。このような環境のなかで、小森忍をはじめ、民藝運動や走泥社、さらにはニューセラミックスなど、多様な潮流が生まれ、育まれた。

本書では、これらの潮流を横断的に捉えることで、従来の工芸史の枠組みを超えた、オルタナティブな陶芸・窯業史の提示を試みる。近年活発化する「工芸」「デザイン」「アート」領域の再定義を背景に、京焼における芸術性（陶芸）と産業化（窯業）の拮抗・併存がもたらす製陶の新規性と発展を、複眼的に考察する。

宮津大輔 著

現代美術史における前衛書のリポジショニング

—墨人会とその同時代表現をめぐる—

「書」と「美術」が東西の二項対立を越え、相互に影響を与えあった状況を抽象表現主義、アンフォルメル、具体美術協会などとの比較から論じること、美術史における「前衛書」のリポジショニングを図る。

定価 四、九五〇円

【目次】

序

第1部 小森忍の陶芸と窯業（1）

第1章 京都市立陶磁器試験場時代—数理的思考の濫觴

第2章 満鉄中央試験所時代—中国倣古陶磁器技法の再現と産業化

第3章 満洲・旬雅堂時代—茶道具から鑑賞陶器、建築内装材へ

第2部 小森忍の陶芸と窯業（2）

第1章 瀬戸時代（1）—山茶窯による建築内装

第2章 瀬戸時代（2）—山茶窯、名古屋製陶における洋食器の東洋化

第3章 総括・小森忍の仕事—芸術性と産業化の拮抗・併存

第3部 継承される京焼の革新性

第1章 戦時下における京焼の技術進化

第2章 京焼における芸術潮流

第4部 窯業からニューセラミックスへ

—京焼が生む最先端技術—

第1章 京焼におけるニューセラミックスの黎明—村田製作所

第2章 京焼におけるニューセラミックスの発展—京セラ

結 京焼にみる芸術性と産業化の拮抗と併存

並木誠士編

近代京都の美術工芸Ⅱ—学理・応用・経営

京都特有の時代状況下で展開した近代美術工芸の世界を、「学理」—即ち当時最新の化学知識の導入と、その伝統工芸への「応用」、そしてそれらの制作者をとりまく場の「経営」という3つの観点から、総合的に描き出す。

定価 一三、二〇〇円

表示価格は税込

川見典久（黒川古文化研究所研究員）著

古武器の探究——一八世紀における刀剣・甲冑調査

12月刊行予定

A5判上製・約三八六頁／定価一、〇〇〇円

徳川吉宗は、寺社や大名などが所蔵する由緒ある武器・武具を上覧するとともに、甲冑師らを西国に派遣して古武器を探索させ、その模写を献上させた。刀剣については、本阿弥家に名刀を列挙した『享保名物帳』の提出を命じ、刀鍛冶の全国調査を行い、優れた刀工を江戸へ呼び寄せた。その目的は、古製を知り、新たな武器を製作する際の参考とするためである。

このような吉宗の活動の流れを受け、松平定信による古文物調査の図録『集古十種』の編纂、伊勢貞丈らによる武家故実研究の高まりなど、古いものを見直す動きが起ころ。本書は、古武器を題材として、近世中期から後期にかけて起こった復古・好古の潮流を検証する古器物考証史の試みである。

【目次】

- 序章 古武器考証史の展覧
- 第一章 八代將軍徳川吉宗による刀剣調査と『享保名物帳』の意義
- 第二章 『集古十種稿』の分析からみる『集古十種』完成までの過程
- 第三章 『集古十種』兵器篇と一八世紀の古武器調査
- 第四章 模写図からみた伊勢貞丈と古武器考証ネットワーク
- 終章 好古の潮流における古武器

近藤好和著

日本古代の武具——『国家珍宝帳』と正倉院の器仗

『国家珍宝帳』と正倉院の器仗をそれぞれ詳細に解説し、図版編には正倉院器仗を中心に多数の器仗を収録。

定価 九、三五〇円

木村法光著

正倉院宝物と古代の技

正倉院宝物はどのような材料で製作されているのか。奈良時代の匠が用いた技術が優れていた理由は何なのか。

定価 一六、五〇〇円

奈良国立博物館編

正倉院宝物に学ぶ

154

日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、東大寺・奈良国立博物館ゆかりの国内外の研究者が、正倉院宝物の様々な面を報告・討論する。シリーズ全4巻。

定価 第1巻・第3巻 三、三〇〇円 第2巻 二、七五〇円 第4巻 四、一八〇円

法隆寺編

法隆寺史 上中

日本最初の世界文化遺産である法隆寺1400年におよぶ歴史を通観する、初の寺史全3巻。

定価 各七、四八〇円

表示価格は税込

三宅秀和（群馬県立女子大学准教授）著

狩野光信の研究

2月刊行予定

A5判上製・約四〇〇頁／予価二一、〇〇〇円

狩野光信は、永徳と探幽をつなぐ重要な存在でありながら、その史的位相について十分に明らかにされてはこなかった。没後に「へた右京」などの評言も残る光信であるが、信長・秀吉・家康という三人の天下人の御用をつとめた唯一の狩野家当主であり、やまと絵制作にあたって指導的地位を確立していた。時の権力者たちの要望に懸命の画業で応えた光信が、徳川の世に遺したものは何だったのか。本書は、狩野光信の様式とはいかなるものか、それらがいかんして成立し展開したのかを、作品の造形面から検討するとともに、主たる需要者であった豊臣政権との関係から考察し、解明を試みるものである。

古画備考研究会編

校訂 原本 古画備考（全5巻）

現代の視点から、美術史成立前夜における江戸の学知の達成を世に問い直す。

定価七七、〇〇〇円

古画備考研究会編

原本『古画備考』のネットワーク

東京藝術大学附属図書館に所蔵される朝岡興碩自筆の原本『古画備考』を中心に、古画備考研究会が取り組んできた共同研究の成果。

定価一〇、二〇〇円

【予定目次】

序論	狩野光信をめぐる二つの評言「倭画風情轻柔可愛」と「へた右京」
第一章	国立国会図書館所蔵「賦何船連歌」の検討―園城寺勧学院客殿障壁画と関連して
第二章	狩野光信様式の把握―園城寺勧学院客殿一間の障壁画を中心として
第三章	園城寺勧学院客殿二の間障壁画の検討―「別筆説」と一の間との連関
第四章	狩野光信と狩野光信様式の人物図
第五章	狩野光信様式の源氏物語絵と豊臣政権―狩野光信様式成立契機試論
第六章	細見美術館所蔵「豊公吉野花見図屏風」と文禄三年太閤秀吉の吉野の花見
第七章	近世名所図屏風における吉野と厳島―その組み合わせと豊臣政権との関わりについて
第八章	土佐光吉宛平家絵制作関連書状の再検討
終章	豊臣・徳川並立期における狩野光信と孝信
結論	

京都国立博物館編

黄金のとき 桃山絵画

狩野派の画師が活躍した桃山時代の代表的な絵画100点を紙上展観。

定価四四、〇〇〇円

宇野日出生編／京都府京都文化博物館・京都市歴史資料館企画

京都 実相院門跡

四季の美しさで巷に知られた門跡寺院、実相院の内饰についての探求を試みた初の研究書。

定価二二、〇〇〇円

表示価格は税込

鶴岡明美（昭和女子大学教授） 著

江戸の実景を
記録する——イメージの背景と
そのゆくえ（仮）

12月刊行予定

A5判上製 約四〇〇頁／予価 一、〇〇〇円

冷泉為人 著

円山応挙論

応挙とはどのような画家なのか。そして、応挙の写生とは何なのか。

定価 一〇、四五〇円

小泉和子 編

茶と

室内デザイン

茶が日本住宅の室内意匠にあたえた影響について、それぞれの専門の立場からの論考を収録。茶道と室内デザインの関係性を考える。

定価 三、八五〇円

【予定目次】

はじめに

第1章 拡散された実景

第2章 〔扶桑名勝図〕ほか
奉じられた実景第3章 〔岡岷山〕「都志見往来日記・同諸勝図」・谷文晁「熊野舟行図巻」
企てられた実景

第4章 大野文泉「南部下北半島真景図」・津軽外ヶ浜真景図

第5章 秘匿された実景

第6章 開示された実景
〔新編武蔵風土記稿〕挿図第7章 共有された実景
「日光山志」第8章 追認された実景
「谷文晁」宮城野聚勝園記第9章 目賀田守隆「蝦夷歴検真図」
演出された実景

第10章 「小笠原島真景図」

第11章 〔小笠原島真景図〕

第12章 〔小笠原島真景図〕

第13章 〔小笠原島真景図〕

第14章 〔小笠原島真景図〕

第15章 〔小笠原島真景図〕

第16章 〔小笠原島真景図〕

第17章 〔小笠原島真景図〕

第18章 〔小笠原島真景図〕

第19章 〔小笠原島真景図〕

第20章 〔小笠原島真景図〕

第21章 〔小笠原島真景図〕

第22章 〔小笠原島真景図〕

第23章 〔小笠原島真景図〕

第24章 〔小笠原島真景図〕

第25章 〔小笠原島真景図〕

第26章 〔小笠原島真景図〕

第27章 〔小笠原島真景図〕

第28章 〔小笠原島真景図〕

第29章 〔小笠原島真景図〕

第30章 〔小笠原島真景図〕

第31章 〔小笠原島真景図〕

第32章 〔小笠原島真景図〕

第33章 〔小笠原島真景図〕

第34章 〔小笠原島真景図〕

第35章 〔小笠原島真景図〕

第36章 〔小笠原島真景図〕

第37章 〔小笠原島真景図〕

第38章 〔小笠原島真景図〕

川崎博 著

応挙の日記 天明八年〜寛政二年

——制作と画料の記録

円山応挙（1733〜95）が残した、天明八年八月一日から寛政二年九月六日までの制作の記録を、写真付きの翻刻とともに、解説を付して紹介する。

定価 五、五〇〇円

河野元昭 著

江戸絵画 京と江戸の美

江戸絵画の光はすべて西方から射してきた――

定価 一六、五〇〇円

松本和也（神奈川大学教授）著

印象派の超克

—近代日本における西洋美術受容の言説史—

10月刊行予定

A5判上製・約三四〇頁／定価 七、七〇〇円

明治後期、黒田清輝らの帰朝を皮切りに流れ込んできた「印象派」は、日本の洋画界に大きな影響を与えた。そのなかでも当時、モネに擬され注目を集めたのが山脇信徳（一八八六―一九五二）の作品であり、第三回文展で褒賞となつた《停車場の朝》（二九〇九）や《夕日》（一九一一）は、文壇・画壇を横断して「絵画の約束」論争を引き起こした。それは、印象派（およびそれ以降）の西洋美術が、日本に受容される際に生じうる反発や葛藤の、いわば集約的事例であつた。

明治末の日本で、印象派からポスト印象派へと通じる洋画の新潮流が、どのように受容・批判され、いかなる葛藤を生んだのかを、山脇信徳とその絵画表現を結節点として、岸田劉生、高村光太郎、白樺派ら同時代の主要人物の残した言論から明らかにしていく。

松本和也著

戦時下の「文化」を
考える―昭和〇年代

「文化」の言説分析

昭和戦前期、「文化」はどのような語られ、いかなる意味を担っていたのか。「文化」にかかわる歴史的転回を、当時の膨大な言説の分析から検証した。

定価 一一、〇〇〇円

「予定目次」

はじめに 日本の印象派

第一部

第一章 山脇信徳へのアプローチ

第二章 洋画史・日本のモネ・言説史
西洋美術の新傾向をめぐる言説史

第三章 印象派、ポスト印象派を中心に
帰朝する新進洋画家

——バイオニアとしての有島生馬・齋藤與里・高村光太郎

第二部

第四章 「生の芸術」論争・再考
「DOのDO」／「地方色」からみた山脇信徳《停車場の朝》

第五章 山脇信徳作品展覧会をめぐる「絵画の約束」論争・再考
「自己」か「公衆」か

第六章 山脇信徳「断片」の歴史的意義
——フォーヴィスム／エキスプレッショナルイズムへ

第三部

第七章 「自然」と「生活」をめぐる岸田劉生の芸術論
——白樺派言説を補助線として

第八章 ヒュウザン会（フウザン会）展覧会の同時代評価
——印象派以降の展開

第九章 「心的印象」を象徴的に描くこと
——萬鐵五郎の「新しい原始時代」

結論 印象派の超克

並木誠士著

近代日本における

「絵画の変」―洋画の

流行からデザインの導入まで

近代日本における絵画をめぐる変化を「絵画の変」と捉え、当時の資料を繙きながらその様相を明らかにしていく。

定価 七、一五〇円

思文閣グループの
逸品紹介

美の縁

也又或震然揭旗鼓亦皆不知解體之法徒屬孟浪豈不悶乎惜哉世雖有豪傑士汚習惡乎耳目未能披雲霧而見青天也故苟非改面目者則不能入其室也嗚呼人有能有不能余之不才斷斷無它恭唯獨於斯業專精得以明之誠無惑乎古之人而其所權輿要在改面目也如與余同志從事于斯則庶乎得而至也雖然余不憚乎大辭故於斯書姑達其意而已讀者如有不解者追余之生貨訪之可也



★ 解體新書 五冊

『解體新書』は、ドイツの解剖学者 Johann Adam Kulmus 著『Anatomische Tabellen』(1731)のオランダ語訳版『Ontdeekkundige Tafelen』(1734)を原著として翻訳された、日本における西洋解剖学及び蘭学全般における先駆的名著である。

翻訳は約四年をかけ前野良沢・杉田玄白・中川淳庵・石川玄常・桂川甫周他数名により進められ、江戸の書肆・須原屋市兵衛によって刊行された。

『解體新書』には、刊記の版元である須原屋市兵衛の居所を「室町二丁目」と「室町三丁目」とする二種が知られている。本書は「室町三丁目」で、巻末に『俳諧明題集』から始まる広告を二丁半付す。諸説あるが、室町三丁目で広告を伴うものは初版本とされ、室町二丁目のものと比べると、その伝本は遥かに少ない。

本書は序図一冊と本文四冊で構成される。序図巻には吉雄耕牛の序文と玄白訳の原著者序文、凡例を載せ、秋田藩士・小田野直武による解剖図を二十一葉収める。序図一冊は取り合わせ本だが、原著銅版画の精細な描写を木版で見事に再現し、判型や刷りの状態は初版本と同様である。一部傷みはあるが、各冊草花模様を空押しした原表紙に元題簽を残し、原装を保っている。

西洋医学発展の象徴である『解體新書』の初版本として、本書は伝存稀な極めて高い価値を有するものである。



思文閣大入札会

ご売却を検討されているお客様の美術品を
求める方へとお引き合わせする、思文閣独自の入札会です。



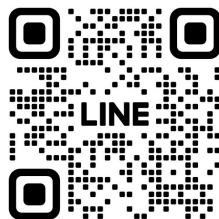
大入札会専用サイト

<https://sale.shimbunkaku.co.jp>

※初めて利用される方は会員登録が必要となります。

思文閣大入札会

LINE 公式アカウント

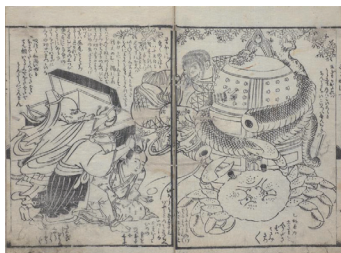


大入札会に関わる情報発信のほか、
作品コンディション等をお問合せいただく
窓口としてご活用ください。

SHIBUNKAKU

思文閣

思文閣古書資料目録



猿蟹遠昔噺

全一冊

恋川春町作・画 葛屋重三郎版

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っており
ます(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問
い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 752-0005 FAX (075) 525-7155

<https://www.shimbunkaku.co.jp/kosho/>

kosho@shimbunkaku.co.jp

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル

「Shimbunkaku Works」

思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを
活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。
詳細は小社までお問い合わせください。



京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 533-6860 FAX (075) 531-0009

<https://www.shimbunkaku.co.jp/publishing/>

pub@shimbunkaku.co.jp